

# 中国横断自動車道尾道松江線建設 に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(22)

いなほしば  
稻干場第2～4・9号古墳

2012

財団法人 広島県教育事業団

# 中国横断自動車道尾道松江線建設 に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(22)

## いなほし ば 稻干場第2～4・9号古墳



●は稻干場古墳群

2012

財団法人 広島県教育事業団

## 例　　言

- 1 本書は、平成19（2007）年度に発掘調査を実施した中国横断自動車道尾道松江線建設事業に係る稻干場第2～4・9号古墳（庄原市口和町大月所在）の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、国土交通省中国地方整備局三次河川国道事務所からの委託を受け、財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室が実施した。
- 3 発掘調査は、岩本芳幸（現広島県立白木高等学校）、島田朋之（現広島県教育委員会事務局文化財課）が担当し、安西工業株式会社が発掘調査支援業務を行った。安西工業株式会社の調査員は坂口尚人、東伸浩、久富正登である。
- 4 出土遺物の洗浄・整理作業、図面整理は、島田、賃金職員の有原ひろみ、大田けい子が行った。
- 5 出土遺物の復元作業は有原が行い、実測・写真撮影は島田が行った。
- 6 本書の執筆は島田が、編集は島田、沢元保夫が行った。
- 7 遺物実測図の断面表示は、黒塗りが須恵器、白抜きが縄文土器、弥生土器、土師器、石器、斜線が鉄製品である。
- 8 本書に使用した造構表示記号は、S B：住居跡、S K：埋葬施設を含む土坑、S D：溝状造構、S X：性格不明の造構である。
- 9 図版と挿図の遺物番号は一致する。
- 10 第1図は、国土交通省国土地理院発行の50,000分の1地形図「上布野」を使用した。
- 11 本書に掲載している図面の座標は、平面直角座標系第Ⅲ座標系（旧日本測地系）に基づいており、方位は座標北である。
- 12 記録類及び出土品は、広島県立埋蔵文化財センター（広島市西区観音新町四丁目8-49）で保管している。

## 目 次

I	はじめに	(1)
II	位置と環境	(5)
III	調査の概要	(10)
IV	遺構と遺物	(13)
1	稻干場第2号古墳	(13)
2	稻干場第3号古墳	(20)
3	稻干場第4号古墳	(27)
4	稻干場第9号古墳	(34)
V	まとめ	(43)

## 挿 図 目 次

第1図	中国横断自動車道尾道松江線路線図	(3)
第2図	周辺遺跡分布図(1:50,000)	(6)
第3図	遺跡周辺地形図(1:5,000)	(11)
第4図	調査区周辺地形図(1:1,000)	(12)

### 稻干場第2号古墳

第5図	地形測量図(1:200)	(13)
第6図	墳丘遺存図・遺構配置図(1:200)	(14)
第7図	墳丘土層断面図(1:80)	(15)
第8図	S B 1 実測図(1:60)	(17)
第9図	S K 1, 2 実測図(1:30)	(18)
第10図	S K 3 実測図(1:30)	(19)
第11図	S X 1 実測図(1:20)	(19)

### 稻干場第3号古墳

第12図	地形測量図(1:200)	(20)
第13図	墳丘遺存図・遺構配置図(1:200)	(21)
第14図	墳丘土層断面図(1:80)	(22)
第15図	S K 1 実測図(1:30)	(23)
第16図	S K 2 実測図(1:30)	(24)
第17図	S K 3, 4 実測図(1:30)	(24)
第18図	S D 1 (1:80)	(25)

### 稻干場第4号古墳

第19図 地形測量図 (1 : 200) .....	(27)
第20図 墳丘遺存図・遺構配置図 (1 : 200) .....	(28)
第21図 墳丘土層断面図 (1 : 80) .....	(29)
第22図 SK 1 実測図 (1 : 40) .....	(30)
第23図 SK 2 実測図 (1 : 30) .....	(31)
第24図 SK 3 実測図 (1 : 30) .....	(33)

### 稻干場第9号古墳

第25図 地形測量図 (1 : 200) .....	(34)
第26図 墳丘遺存図・遺構配置図 (1 : 200) .....	(35)
第27図 墳丘土層断面図 (1 : 80) .....	(36)
第28図 SK 1 実測図 (1 : 30) .....	(38)
第29図 SK 2 実測図 (1 : 30) .....	(39)

### 出土遺物

第30図 土器実測図 (1) (1 : 3) .....	(40)
第31図 土器実測図 (2) (1 : 3) .....	(41)
第32図 鉄製品実測図 (1 : 2) .....	(41)
第33図 管玉実測図・古錢拓影 (1 : 1) .....	(41)
第34図 石製品実測図 (1 : 2, 1 : 3) .....	(42)

## 表 目 次

第1表 中国横断自動車道尾道松江線建設事業に伴う発掘調査報告書刊行遺跡一覧 .....	(2)
第2表 稲干場第3号古墳出土須恵器観察表 .....	(26)
第3表 稲干場第4号古墳出土須恵器観察表 .....	(32)
第4表 稲干場第2～4、9号古墳出土土師器観察表 .....	(42)

## 図 版 目 次

### (1) 稲干場第2号古墳

図版1 a 調査前 (北東から) .....	b 空中写真 (直上から) .....	c 墳丘断面 (北東から) .....
図版2 a 墳丘断面 (北西から) .....	b 完掘状況 (北東から) .....	c 墳頂部完掘状況 (南から) .....

図版3 a 調査区南部完掘状況  
(南から)  
b S B 1 (南東から)  
c S K 1 (南東から)

図版4 a S K 2 (南東から)  
b S K 3 (南東から)  
c S X 1 (南東から)

#### (2) 稲干場第3号古墳

図版5 a 調査前 (南から)  
b 空中写真 (直上から)  
c 全景 (西から)  
図版6 a 全景 (南から)  
b 墳丘断面 (西から)  
c 墳丘断面 (南から)  
図版7 a 完掘状況 (西から)  
b 完掘状況 (南から)  
c S K 1 (西から)  
図版8 a S K 2 (西から)  
b 周溝遺物出土状況 (西  
から)  
c 周溝遺物出土状況 (南  
から)

#### (3) 稲干場第4号古墳

図版9 a 調査前 (西から)  
b 空中写真 (西から)  
c 全景 (南から)  
図版10 a 墳丘断面 (北から)  
b 墳丘断面 (西から)  
c 完掘状況 (北から)  
図版11 a S K 1 (南西から)  
b S K 2 遺物出土状況 (北  
西から)  
c S K 2 遺物出土状況  
(南西から)  
図版12 a S K 2 (北西から)  
b S K 2 完掘状況 (北西か  
ら)  
c S K 3 (南から)

#### (4) 稲干場第9号古墳

図版13 a 調査前 (東から)  
b 空中写真 (直上から)  
c 全景 (南から)  
図版14 a 全景 (東から)  
b 墳丘断面 (東から)  
c 墳丘断面 (南から)  
図版15 a 完掘状況 (南から)  
b 完掘状況 (東から)  
c S K 1 蓋石検出状況  
(南東から)  
図版16 a S K 1 蓋石検出状況  
(南西から)  
b S K 1 側石検出状況 (南  
東から)  
c S K 1 完掘状況 (南東  
から)

#### (5) 出土遺物

図版17 出土遺物 (1) (遺物番号 1 ~ 24)

図版18 出土遺物 (2) (遺物番号 25 ~ 51)

## I はじめに

稻干場第2～4・9号古墳の発掘調査は、中国横断自動車道尾道松江線建設事業に伴い実施したものである。事業は、尾道市美ノ郷町を山陽自動車道との結節点とし、県内の世羅町・三次市・庄原市の各市町を通過して島根県松江市に至る高速道路で、沿線地域の産業・経済・文化の発展に寄与することを目的として計画されたものである。

日本道路公团中国支社広島工事事務所（以下、「道路公团」という。現西日本高速道路株式会社）は、平成13（2001）年7月18日、三次市四拾貫町から庄原市口和町大月間の事業地内の文化財の有無及び取扱いについて、広島県教育委員会（以下、「県教委」という。）に協議した。県教委はこれを受けて現地踏査を行い、平成15年9月25日、道路公团に周知の埋蔵文化財包蔵地である稻干場第4号古墳と、試掘調査が必要な箇所が存在する旨を回答した。その後、事業地の計画変更に伴い、道路公团は再度県教委に協議書を提出し、県教委は平成16年8月23日、道路公团に周知の埋蔵文化財包蔵地である稻干場第4号古墳と、試掘調査が必要な箇所が存在する旨を回答した。県教委では、順次試掘調査を実施したが、このうち、平成18年12月7・8日に実施した「要試掘地点口和第9・10地点」の調査では、稻干場第4号古墳の範囲を確定するとともに、新たに稻干場第2・3号及び第9号古墳の存在を確認した。このため、平成19年2月14日にこのことを道路公团に替わって開発事業主体となった国土交通省中国地方整備局三次河川国道事務所（以下、「国土交通省」という。）事業主体の変更是、当該道路が平成18年度から国の新直轄方式で建設されることとなつたため）に回答した。この遺跡の取り扱いについて県教委と国土交通省は協議を重ねたが、設計変更による現状保存は困難との結論に達した。国土交通省は同年9月7日に文化財保護法（以下、「法」という。）第94条第1項の規定に基づく埋蔵文化財発掘の通知を県教委に提出し、県教委は同年9月10日、事前に発掘調査が必要である旨国土交通省に回答した。これを受けて国土交通省は、同日付けで財団法人広島県教育事業団埋蔵文化財調査室（以下、「教育事業団」という。）に、稻干場第2～4・9号古墳の調査依頼を行い、本遺跡の発掘調査委託契約を締結した。その後、教育事業団は、同年9月28日に法第92条第1項の規定に基づく発掘届けを県教委あて提出し、県教委から同年10月1日付けで、法の趣旨を尊重し、慎重に発掘調査を実施するよう指示を受けた。発掘調査は、同年10月9日から12月21日まで実施した。

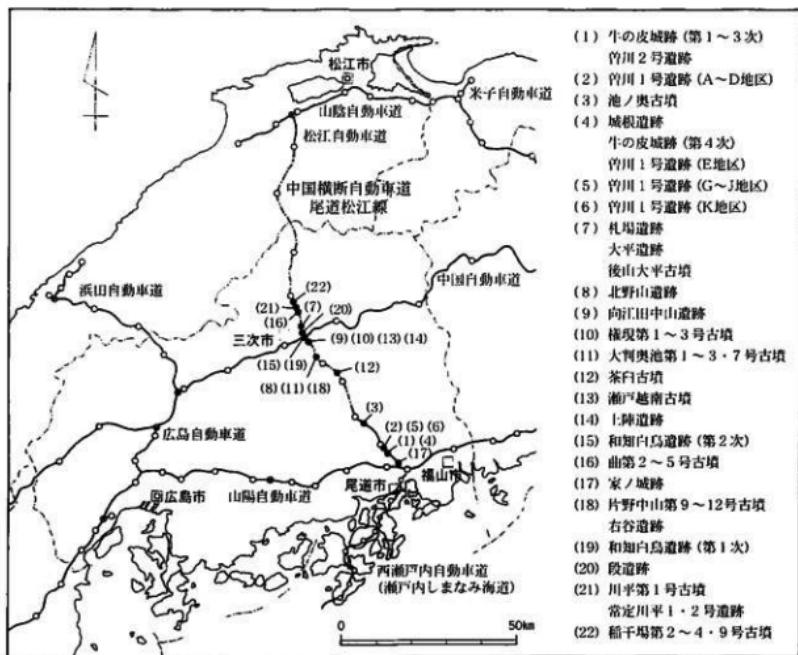
本報告書は、以上のような経緯のもとに行った発掘調査の内容をまとめたものであり、今後、本地域の埋蔵文化財資料として、また、地域の歴史を解明する手がかりとして、有効に活用されれば幸いである。

なお、発掘調査に当たっては、国土交通省中国地方整備局三次河川国道事務所、庄原市教育委員会及び地元の皆様に、多大なご協力をいただいた。記して感謝の意を表します。

第1表 中国横断自動車道松江線建設事業に伴う発掘調査報告書刊行遺跡一覧

報告書	遺跡名	地区名	調査期間	所在地	時期	内容			
(1)	牛の皮城跡 (北郭群)	第1次 歴史堅堀群	平成15年1月20日～ 3月14日	尾道市御調町大町字二の丸	中世	城跡			
		第2次 1～4郭	平成15年7月7日～ 10月31日						
		第3次 西堅堀	平成15年11月10日～ 11月28日						
	曾川2号道路		平成15年1月20日～ 3月7日	尾道市御調町大町字曾川	古代～中世	集落跡			
(2)	曾川1号道路	A地区 旧・平成14年度調査区	平成14年10月21日～ 平成15年1月17日	尾道市御調町大町字曾川	弥生時代～中世	集落跡			
		B地区 旧・P2第一調査区	平成15年4月7日～ 5月23日						
		C地区 旧・P2第二調査区							
		D地区 旧・P1	平成16年1月6日～ 2月5日						
(3)	池ノ奥古墳		平成16年8月23日～ 10月28日	世羅郡世羅町宇治原字天神	古墳時代後期	古墳			
(4)	城根遺跡		平成15年1月27日～ 3月7日	尾道市御調町大町字城根	古墳時代か	箱式石棺			
	牛の皮城跡 (北郭群)	第4次 5郭	平成18年1月30日～ 2月24日	尾道市御調町大町字二の丸	中世	城跡			
	曾川1号道路	E地区 旧・P4	平成15年12月1日～ 12月19日	尾道市御調町大町字米田	绳文時代後期～中世	遺物包含層			
(5)	曾川1号道路	G地区 旧・P3	平成16年6月7日～ 8月6日	尾道市御調町大町字曾川・米田	弥生時代～中世	集落跡			
		H地区 旧・P3側道							
		I地区 旧・P4側道	平成17年1月11日～ 3月4日						
		J地区 旧・P2							
(6)	曾川1号道路	K地区	平成17年4月11日～ 7月1日	尾道市御調町大町字曾川・米田	弥生時代～中世	集落跡			
(7)	札場古墳		平成17年11月21日～ 平成18年1月27日	三次市后山町字札場	古墳時代後期	古墳			
	大半遺跡		平成19年6月21日～ 10月5日	三次市后山町字大半	弥生時代後期～古代	集落跡			
	後山大半古墳		平成19年6月21日～ 10月5日	三次市后山町字大半	古墳時代後期	古墳			
(8)	北野山遺跡		平成18年7月3日～ 8月4日	三次市吉舎町字敷地	平安時代	仏教関連の施設跡			
(9)	向江田中山遺跡		平成18年4月17日～ 6月23日	三次市向江田町字中山	古墳時代末～古代	集落跡			
(10)	櫛現第1～3号古墳		平成17年7月11日～ 11月11日	三次市向江田町字櫛現	古墳時代中期	古墳			
(11)	大番奥池第1～3・7号古墳		平成18年4月17日～ 8月4日	三次市吉舎町字敷地	古墳時代後期	古墳			
(12)	茶臼古墳		平成20年7月7日～ 9月5日	三次市甲斐町字茶臼	古墳時代中期～古代	古墳			
(13)	瀬戸越南古墳		平成19年6月25日～ 8月10日	三次市向江田町字瀬戸越	古墳時代中期	古墳			
(14)	上陣遺跡		平成19年7月9日～ 8月31日	三次市向江田町字上陣	古墳時代後期	集落跡			
(15)	和知白鳥遺跡(第2次)		平成19年9月25日～ 12月21日	三次市和知町字白鳥	後期旧石器時代	集落跡			
(16)	曲第2～5号古墳		平成19年7月2日～ 9月21日	庄原市口和町金田字本谷	古墳時代中期	古墳			
(17)	家ノ城跡	第1次 南東郭群	平成15年9月16日～ 10月31日	尾道市木ノ庄町木梨字家城東半	中世	城跡			
		第2次 南東郭群	平成16年5月17日～ 6月11日						
		第3次 1郭周辺	平成17年10月17日～ 11月11日						
		第4次 1郭周辺	平成18年4月17日～ 7月21日						
		第5次 1郭周辺	平成19年4月16日～ 6月15日						

報告番号	遺跡名	地区名	調査期間	所在地	時期	内容
(18)	片野中山第9~12号古墳		平成19年4月16日~8月8日	三次市吉倉町字敷地	古墳時代中期	古墳
	右谷遺跡		平成19年4月16日~8月8日	三次市吉倉町字敷地	古墳時代後期~古代	集落跡
(19)	和知白鳥遺跡(第1次)		平成18年4月17日~12月8日	三次市和知町字白鳥・四條貫町字三重	古墳時代中期~古代	集落跡・古墳
(20)	段遺跡	第1次	平成18年9月19日~12月15日	三次市四條貫町字段	古墳時代	集落跡
		第2次	平成19年9月25日~12月21日		後期旧石器時代	集落跡
(21)	川平第1号古墳		平成20年4月21日~6月20日	庄原市口和町常定字川平	古墳時代後期	古墳
	常定川平1号遺跡				古墳時代中期	集落跡
	常定川平2号遺跡				縄文時代	竪穴
(22)	稻干場第2~4・9号古墳		平成19年10月9日~12月21日	庄原市口和町大月字稻干場	古墳時代後期	古墳



第1図 中国横断自動車道尾道松江線路線図 <(1)~(22)は報告書番号>

- (1) 財團法人広島県教育事業団『牛の皮城跡・曾川2号遺跡 中国横断自動車道尾道松江線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(1)』 2005年
- (2) 財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(2) 曾川1号遺跡(A～D地区)』 2006年
- (3) 財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(3) 池ノ奥古墳』 2007年
- (4) 財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(4) 城根遺跡 曾川1号遺跡(E地区) 牛の皮城跡(第4次)』 2008年
- (5) 財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(5) 曾川1号遺跡(G～J地区)』 2008年
- (6) 財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(6) 曾川1号遺跡(K地区)』 2008年
- (7) 財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(7) 札場古墳・大平遺跡・後山大平古墳』 2009年
- (8) 財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(8) 北野山遺跡』 2009年
- (9) 財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(9) 向江田中山遺跡』 2010年
- (10) 財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(10) 横現第1～3号古墳』 2010年
- (11) 財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(11) 大赤奥池第1～3・7号古墳』 2010年
- (12) 財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(12) 茶臼古墳』 2011年
- (13) 財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(13) 濱戸越南古墳』 2011年
- (14) 財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(14) 上陣遺跡』 2011年
- (15) 財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(15) 和知白島遺跡1』 2011年
- (16) 財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(16) 曲第2～5号古墳』 2011年
- (17) 財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(17) 家ノ城跡』 2012年
- (18) 財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(18) 片野中山第9～12号古墳・右谷遺跡』 2012年
- (19) 財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(19) 和知白島遺跡2』 2012年
- (20) 財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(20) 段遺跡』 2012年
- (21) 財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(21) 川平第1号古墳・常定川平1・2号遺跡』 2012年

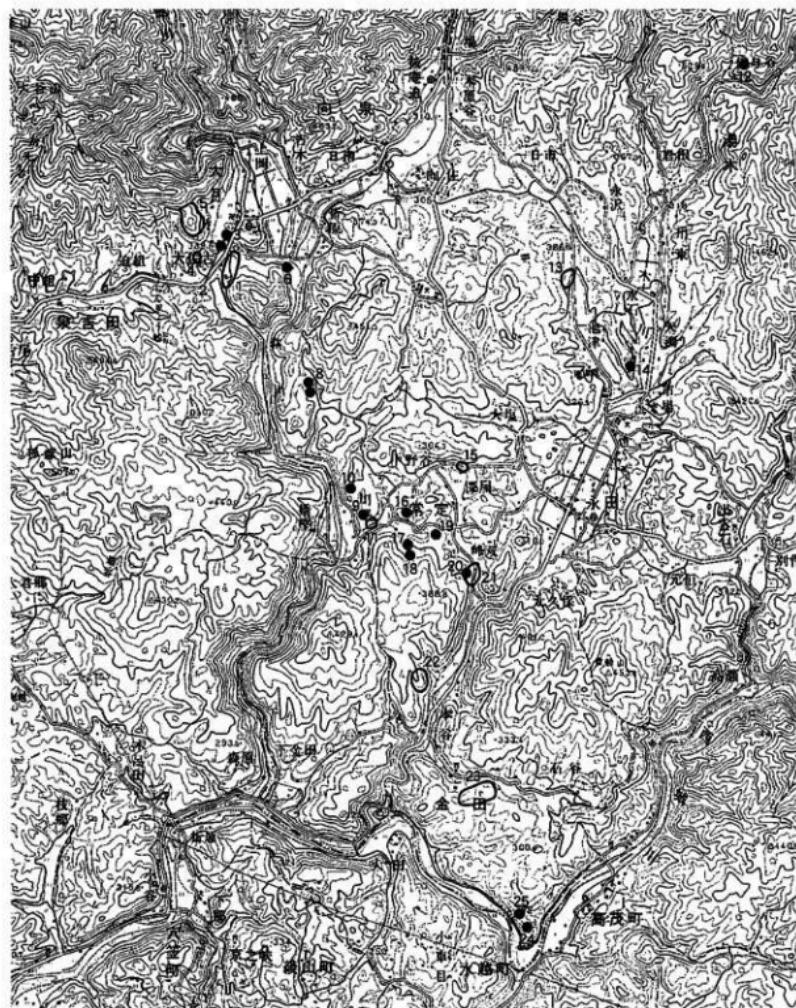
四 本報告書

## II 位置と環境

福干場第2～4・9号古墳は、庄原市口和町大字大月に所在する。庄原市は中国山地の南側に当たり、北に高く南に低い地勢である。県北東部に位置し、北と東は県境となり、北東部は鳥取県日野郡日南町、島根県仁多郡奥出雲町、雲南市、北西部は島根県飯石郡飯南町に接し、東は岡山県新見市と接する。また、西部が三次市、南東部が神石高原町、府中市と接している。口和町の北部には、釜峰山(788m)、笠尾山(1,019m)、八国見山(845m)、野呂山(705m)などの山々が連なり、この山地部に源を発する藤根川、湯木川、萩川(宮内川と竹地川が合流し萩川となる)が南流し、それぞれ西城川に流れ込む。口和町大月地区は、庄原市の西部に位置し、同市街地の北西約14km、宮内川と竹地川の合流点を中心に広がる盆地に当たる。福干場古墳群は、この盆地の南側に位置する標高約418mの山塊から北西方向に延びる尾根上に13基の古墳が分布する。この尾根からほぼ南北方向に派生する標高約325mの尾根上に第2～4号古墳、さらにこの尾根の北側から西に延びる標高約321mの尾根先端に第9号古墳が立地する。

旧石器時代の25,000年前、九州鹿児島湾北部の大噴火で、膨大な火山灰が、列島全体を覆うように降灰した<sup>11)</sup>。この火山灰は姶良丹沢火山灰(以下、「AT」という。)と呼称されている。後期旧石器時代は、AT層を境に、大まかに前半期と後半期に分けられ、口和町周辺に人が住み始めたのは、後期旧石器時代前半と考えられている。この時期に属す向泉川平1号遺跡<sup>12)</sup>は、萩川の東岸の低丘陵上に位置する。小規模であるが一定期間活動が行われていた集落で、石器とともに石器製作時の剥片が集中する径2～6mの遺物集中部を、7箇所確認している。ATの上層からも径2mの範囲の遺物集中部を1箇所確認しており、後期旧石器時代後半の小規模な石器製作址と考えられている。この他に湯木地区から池津地区に抜ける道路の崖面で黒曜石片が採集されており、付着していた土は黒フク下の黄褐色土(吉備土)より下に堆積する赤褐色粘土と確認<sup>13)</sup>されている。また、同崖面で縦長の剥片が2点採集されている。

縄文時代には、宮内船谷地区の丘陵部から表面にナタリ条痕をよく残す後期前半の土器片が、河川部から磨製石斧がそれぞれ採集されている<sup>14)</sup>。湯木川最上流域の伊与谷地区の伊与谷遺跡<sup>15)</sup>からは、後期後半～晚期にかけての土器片や磨製石器が採集されている。土器片は摩滅が激しいが、後期後半の縄文が施されるものや、晚期の爪形の刺突を廻らすもの、凸帯に刻目が施されているものが確認できる。注目されるのは大月地区の上原畠遺跡<sup>16)</sup>で、道路工事中に晚期の土器とともに見つかった独鉛石である。これは密教系寺院で使われる独鉛杵に似た石器で、西日本では出土例が少ない。昭和39(1964)年調査の王子塚古墳<sup>17)</sup>の墳丘盛土からは晚期の深鉢形土器片が出土している。平成20(2008)年に発掘調査を行った向泉川平1号遺跡では、町内初となる縄文時代前期の集落跡が確認された。廃棄された土器や石器などの遺物集中部を4箇所、5～10cm程度の焼けた石が数点集まった集石遺構5基を検出した。同年調査の常定川平2号遺跡<sup>18)</sup>では、東斜面で確認された土坑下層から縄文土器が出土し、遺構の立地条件から落とし穴の可能性が考えられている。また、平成21・22(2009・2010)年度に調査を実施した石谷2号遺跡<sup>19)</sup>では、40基を超



- |            |            |            |            |             |
|------------|------------|------------|------------|-------------|
| 1 稲干塙古墳群   | 2 常久遺跡     | 3 原煥遺跡     | 4 善久古墳群    | 5 黒岩城跡      |
| 6 上原烟道跡    | 7 向泉川平1号道路 | 8 向泉川平2号道路 | 9 常定川平1号道路 | 10 常定川平2号道路 |
| 11 川平古墳群   | 12 伊与谷遺跡   | 13 池津古墳群   | 14 王子塙古墳   | 15 常定横穴群    |
| 16 道田山古墳   | 17 中野谷1号窓跡 | 18 中野谷2号窓跡 | 19 崩双製鉄道路  | 20 崩双窓跡     |
| 21 常定峠双横穴群 | 22 古墳群     | 23 金田古墳群   | 24 石谷2号道路  | 25 石谷3号道路   |

第2図 周辺遺跡分布図 (1:50,000)

る土坑が検出され、多くは等高線に沿うか等高線をやや斜めに切るように並んでおり、形態等から落とし穴と考えられる。遺物は出土していないが、縄文時代のものである可能性が高い。

弥生時代の県北では、中期の遺跡として三次市塩町遺跡から装飾性豊かな地域色の強い土器群が出土しており、三次市を中心とした江の川流域に分布する。塩町式土器<sup>④</sup>と呼ばれ中期後半を示す指標となっている。王子塚古墳の墳丘盛土から、前期のヘラ描き沈線を持つ土器片2点が出土しており、古墳周辺では塩町式土器の特徴を持つ土器片1点が採集されている。伊与谷遺跡<sup>⑤</sup>からも、塩町式土器の特徴を持つ土器片が2点出土している。平成20(2008)年度調査の向泉川平2号遺跡<sup>⑥</sup>では、弥生時代後期後半の円形竪穴住居跡を1軒確認した。直径約3.5mの2本柱の住居跡で、壁際には壁溝が廻り、床面のほぼ中央に炉跡を検出している。住居内には炭化した柱材などが遺存しており、焼失住居と考えられる。また、大月地区の原畑遺跡<sup>⑦</sup>から、円形や隅丸方形の住居跡が5軒検出された。このうちの1軒が古墳時代前期の方形竪穴住居跡と重複しており古墳時代前期より古い時期のものであることや、古墳時代には使用しない打製石器が出土したことなどから、弥生時代後期の集落跡と考えられている。

古墳時代になると遺跡の数は増加する。150基程の古墳や横穴墓が、大月地区、常定地区、金田地区、湯木地区を中心に分布する。発掘調査例としては、昭和32・33(1957・1958)年に実施された常定第1号横穴・第2号横穴<sup>⑧</sup>があり、人骨、須恵器、鉄刀、鉄釘などが出土している。その後の、昭和38(1963)年にパイロット事業に伴って行われた常定峯双第1～6号横穴<sup>⑨</sup>の調査では、切妻式家形構造を簡略化した妻入り両袖式の平面形態を持ち、アーチ状の天井部を有する玄室の形状が明らかになっている。羨道部に石積みを行い天井を架構したものも見られ、第1号横穴から、馬具の轡や鉄刀などの鉄製品が出土している。中野谷の丘陵頂部平坦地には、同時に調査した迫田山古墳<sup>⑩</sup>が立地していた。直径約10mの円墳で、既に盗掘を受け、埋葬施設は不明であり、遺物も出土していない。周辺の畠から6世紀後半頃の土師器片や須恵器、鐵滓が採集されている。昭和53(1978)年に町道改良工事に伴って発掘調査の行われた湯木地区の池津第1号古墳<sup>⑪</sup>は、直径13m程の円墳である。埋葬施設は6世紀後半に造られた無袖式の横穴式石室で、7世紀前半までに2回以上追葬が行われていた。装飾須恵器が出土しており、当時、地域を支配した有力者の墓と考えられている。平成10(1998)年に(財)広島県埋蔵文化財調査センターが調査した金田地区の金田第2号古墳<sup>⑫</sup>は、西城川と湯木川に挟まれた標高291.5mの緩やかな丘陵南斜面に立地する。直径15m、盛土が現状で高さ1.3mの円墳で、墳裾を周溝が廻っている。埋葬施設は南南東に開口する無袖式の横穴式石室で、規模は長さ約5.4m、幅約1m、高さ約1.3mである。石室の石材は主に花崗岩である。石室内、石室入口部前面付近から須恵器、土師器、鉄器、耳環、玉類が出土した。石室入口前面左右の墳丘裾に対称的に置かれた大鏡は、墓前祭祀の跡と推定される。出土した須恵器の杯蓋や杯身の特徴から、6世紀末から7世紀初頭を中心に造営されたことが確認されている。当事業団が、平成19(2007)年に中国横断自動車道尾道松江線建設事業に伴って行った曲第2～5号古墳<sup>⑬</sup>の発掘調査では、第2号古墳から県内で11例目となる短甲や鉄刀・鉄鎌などの鉄製品が出土した。平成20(2008)年度に古墳の東側周

溝部分を調査した川平第1号古墳<sup>22</sup>は、直径が約13m、高さは墳丘東縁から1.8m程残存している。周溝内から須恵器の短頸壺や杯蓋、甕の破片が出土した。埋葬施設は未調査だが、古墳の墳頂部が平らであることや埋葬施設の部材と思われる石が周溝内から出土したことから、箱式石棺か石蓋土坑の可能性がある。年代は6世紀後半と推測される。平成20（2008）年度に調査した集落遺跡の番久遺跡<sup>23</sup>では、古墳時代前期から中期と考えられる方形の竪穴住居跡を4軒確認した。その北側の隣接地には、方形の竪穴住居跡13軒、貯蔵穴と考えられる土坑1基などを確認した原畠遺跡がある。この2遺跡は、場所及び遺跡の時期も稻干場古墳群に近く、密接な関係がうかがえる。同年に調査した常定川平1号遺跡<sup>24</sup>からは、南壁東寄りにカマドをもつ竪穴住居跡1軒、掘立柱建物跡1軒を確認した。竪穴住居跡の規模は東西5.5m、南北約4.5mで、深さは40cm程残存していた。時期は6世紀中頃と考えられる。平成21（2009）年に調査を実施した石谷3号遺跡からも、6世紀後半のカマドを持つ方形の竪穴住居跡が検出されている。また、常定地区川平には峯双製鉄遺跡<sup>25</sup>が所在しており、作業場と炉跡2基が確認されており注目される。遺物は須恵器の甕の破片が作業場床面のやや上層から出土し、古墳時代までさかのばる可能性もある。このほかの生産遺跡としては、常定峯双第2号横穴の調査の際に発見され、調査の実施された常定峯双窓跡<sup>26</sup>や須恵器片が採集されている中野谷1・2号窓跡<sup>27</sup>がある。

大化の改新後、壬申の乱を経て、大宝元（701）年に大宝律令が完成し、全国は60余りの国に分割され、現在の庄原市は備後國北西部に位置していた。平安時代に書かれた「倭名類聚抄」によると、備後國は更に14の郡に分かれていたと記されており、口和町周辺を含む現在の庄原市は、恵蘇郡に属していた。奈良県・平城京跡の第13次発掘調査<sup>28</sup>で、第2次内裏の土坑内から出土した木簡の中に、「備後國三上郡調鍬壹拾口 天平十八」「三上郡信敷郷調鍬十口」「口口國三上郡調鍬口口」と記されたものがあり、恵蘇郡に隣接していた三上郡から、鐵鍬が税として中央に納められた記述が見られる。周辺地域では、たら製鉄が盛んに行われていたものと考えられている。町内では飛鳥～平安時代の遺跡の発掘調査事例はなく、当時の状況については不明といわざるを得ない。

戦国時代において、備北の武士団は、北から尼子氏、南から大内氏・毛利氏の圧力を受け、その対応に苦心してきた。「備後太平記卷八」には、他書からの引用としながらも、泉氏が尼子方から毛利方へ寝返る過程が、記録されている。当古墳群の北側には、谷を挟んで黒岩城跡<sup>29</sup>が所在する。黒岩城は、大永年間から天正年間にかけて、周辺の領主であった泉氏の3代にわたる山城である。この城跡は、自然の地形を利用した典型的な多郭階段式の山城跡で、本丸郭や井戸跡などが確認されている。当古墳群の北西方には、天文22（1553）年の毛利軍と尼子軍が戦った、泉合戦の戦場跡<sup>30</sup>がある。当時、この周辺は山陰の尼子氏と山陽の毛利氏の争う最前線で、黒岩城は戦略的にも重要な拠点であった。

なお、前述の王子塚古墳は調査の結果、墳丘が方形であることが明らかになり、出土遺物が土師質土器の小皿のみであることや、墳丘の状態等から中世の墳墓である可能性が高い。

## 参考文献

三次市教育委員会『三次市史』平成13(2001)年

### 註

- (1) 町田洋、新井房夫『新編 火山灰アトラス 日本列島とその周辺』財團法人東京大学出版会 平成15(2003)年
- (2) (財)広島県教育事業団「川平第1号古墳、常定川平1、2号遺跡、向泉川平1、2号遺跡 報告会資料」平成20(2008)年
- (3) 広島県教育委員会『広島県比婆郡口和町 常定峯双遺跡群の発掘調査報告』『広島県文化財報告書 第7集』昭和38(1963)年
- (4) 潮見 浩「備後口和町湯木伊予谷出土の縄文土器」『古代吉備 第5集』昭和38(1963)年
- (5) 島津義昭「西日本の独钻状石器」『九州考古学の諸問題』昭和50(1975)年
- (6) 広島県教育委員会『湯木王子塚墳墓』『広島県文化財報告書 第7集』昭和38(1963)年
- (7) (財)広島県教育事業団・広島県立歴史民俗資料館「3 石谷2号遺跡」「4 石谷3号遺跡」「中国横断自動車道尾道松江線建設事業に係る備北地域埋蔵文化財調査報告会資料」平成22(2010)年  
（附）広島県教育事業団・広島県立歴史民俗資料館「3 石谷2号遺跡」「中国横断自動車道尾道松江線建設事業に係る備北地域埋蔵文化財調査報告会資料」平成23(2011)年
- (8) 広島県立歴史民俗資料館「みよし風土記の丘友の会『-'85年度考古企画展「墓と土器でむすぶ山陽・山陰」特集－弥生時代の土器 展示図録』昭和60(1985)年
- (9) (財)広島県教育事業団「番久遺跡・原畠遺跡見学会資料」平成20(2008)年
- (10) 潮見 浩「備後口和村常定の横穴発掘調査」『古代吉備 第3集』昭和34(1959)年
- (11) 広島県教育委員会「常定迫田山古墳」『広島県文化財報告書 第7集』昭和38(1963)年
- (12) 口和町教育委員会『池津第1号古墳発掘調査報告書』昭和53(1979)年
- (13) (財)広島県埋蔵文化財調査センター『金田第2号古墳 発掘調査報告書』平成11(1999)年
- (14) (財)広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(16) 曲第2～5号古墳』平成23(2011)年
- (15) 奈良国立文化財研究所『平城宮第13次発掘調査出土木簡概報1～7』昭和38～45(1963～1970)年
- (16) 口和町教育委員会『口和町誌』平成12(2000)年

### III 調査の概要

稻干場古墳群は、南側の標高約418mの山塊から、北西方向に延びる尾根上に展開する13基の古墳で構成される。調査した4基の古墳は古墳群の西部に位置する。第2～4号古墳は、尾根からほぼ南西に派生する標高約310～325mの尾根上に立地し、第9号古墳は第2～4号古墳から谷を挟んで北側の標高約321mの尾根先端に位置する。各古墳の調査面積は、稻干場第2号古墳が400m<sup>2</sup>、稻干場第3号古墳が380m<sup>2</sup>、稻干場第4号古墳が750m<sup>2</sup>、稻干場第9号古墳が380m<sup>2</sup>である。

#### 1 稲干場第2号古墳

直径約10mの円墳で、墳裾を幅約2m、深さ1m程の周溝が廻る。埋葬施設は後世の削平を受け失われていたものの、攪乱坑内の埋土中から碧玉製の管玉が1点出土した。溝の南側底面付近から、土師器の破片が出土している。古墳の築造時期は、6世紀頃と考えられる。このほか、古墳の南西側で、弥生時代後期の竪穴住居跡(SB1)、土坑(SK1～3)、時期不明の石組遺構(SX1)を確認した。

#### 2 稲干場第3号古墳

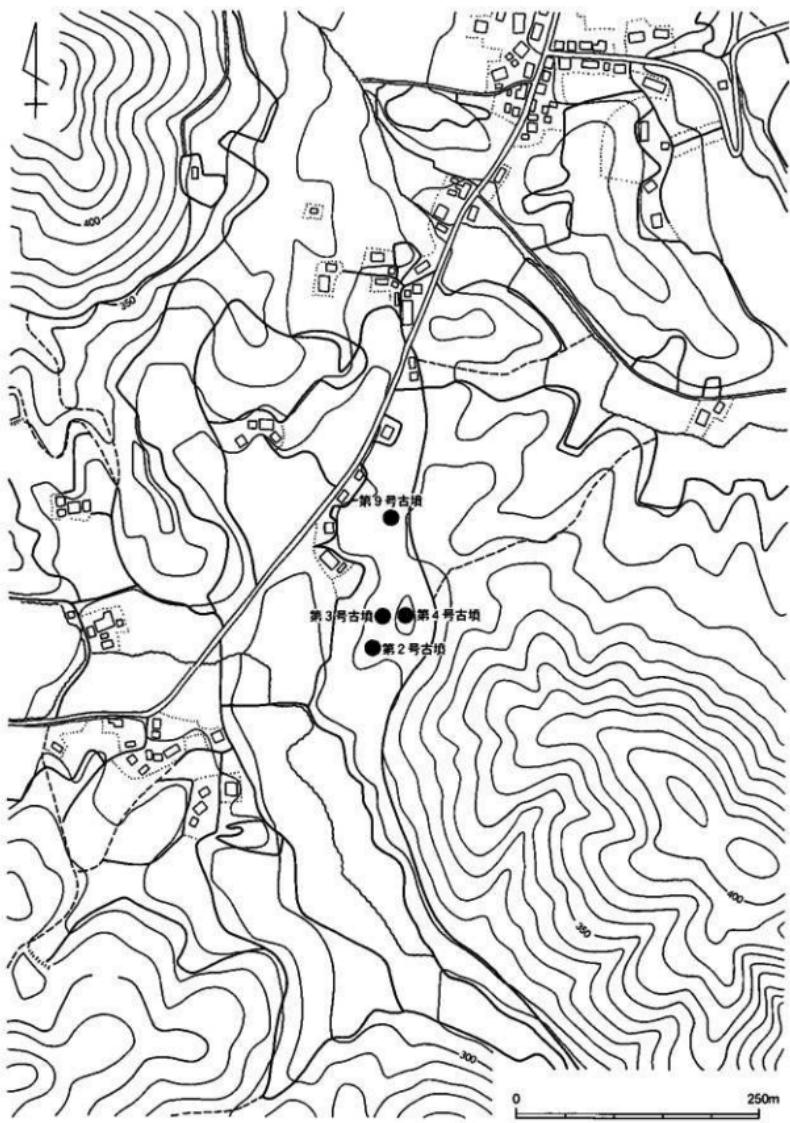
直径約10mの円墳で、第4号古墳のある尾根の西側斜面に立地する。幅約2.2m、深さ1m程の周溝が、墳裾を5分の4程度廻り、古墳北西部で途切れる。墳頂部に2基の埋葬施設(SK1・2)がある。西側の周溝部から、須恵器の杯身、杯蓋、高杯がまとまって出土している。墳丘周辺からは、穿孔のある短頸壺が出土した。古墳北西側から西方向調査区外に向かって、最大幅約6.5m、深さ0.2m程の溝(SD1)がある。溝と接する墳丘西側で土坑(SK3・4)を検出した。古墳の築造時期は6世紀前半と考えられる。

#### 3 稲干場第4号古墳

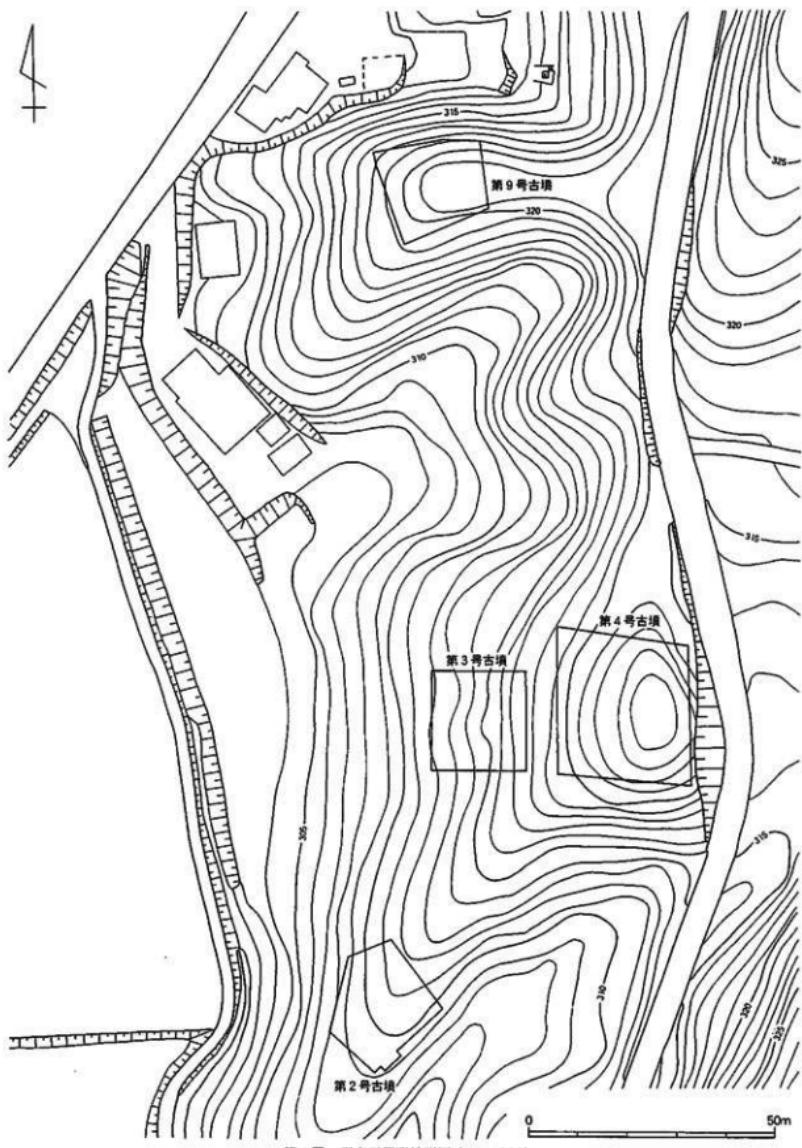
山塊から北西に延びる尾根から、南西に派生する尾根の頂部に位置する。直径約12m、残存する高さは1.7m程で、今回調査した古墳の中で最大規模の円墳である。墳裾を幅約2m、深さ0.5mほどの周溝が廻るが、北東側で一部途切れる。墳頂部に埋葬施設を1基(SK1)確認した。規模は長さ約4m、幅約2m、深さ0.1m程である。副葬品は出土していない。周溝内から土師器の甕が出土した。周溝底面北西部にSK2があり、須恵器の杯身、杯蓋、短頸壺、壺蓋、鐵鑓がまとまって出土した。古墳の築造時期は6世紀中頃と考えられる。墳丘下から土坑(SK3)を検出した。

#### 4 稲干場第9号古墳

西に延びる尾根の先端に位置する、直径約10.5mの円墳である。墳丘裾を、幅約2m、深さ約0.6mの溝が約4分の3程度廻る。埋葬施設は、箱式石棺(SK1)である。土砂が流入し石棺内には人骨は遺存しておらず、遺物は出土しなかった。周溝内から土師器の甕、鐵鑓、砥石が出土した。古墳の築造時期は6世紀後半と考えられる。墳丘下から土坑(SK2)を検出した。



第3図 遺跡周辺地形図 (1 : 5,000)



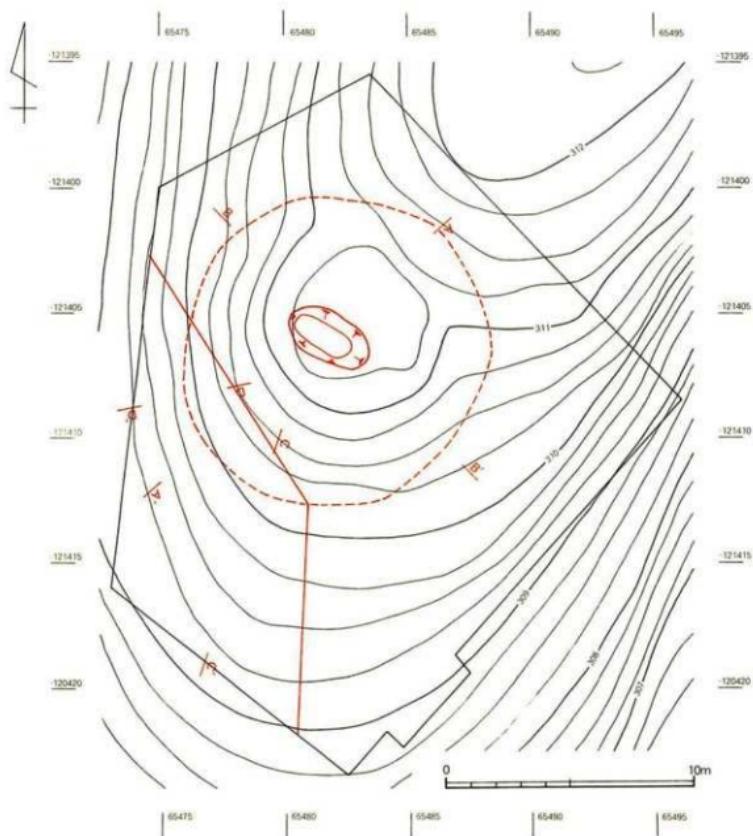
第4図 椰査区周辺地形図 (1 : 1,000)

## IV 遺構と遺物

### 1 稲干場第2号古墳

#### 立地と調査前の状況(第5図、図版1a)

古墳は、標高418mの山塊から北西方向に延びる尾根の西斜面から、南西方向に派生する尾根の先端部に位置する。墳頂部と西側の谷部の標高差は約10mである。緩やかな尾根上に立地し、南西側には第1号古墳が存在する。同尾根の最頂部には第4号古墳が、その西側斜面には第3号古墳が存在する。北東側は、しばらく緩やかな尾根筋が続くが尾根頂部に向かって傾斜30度近く

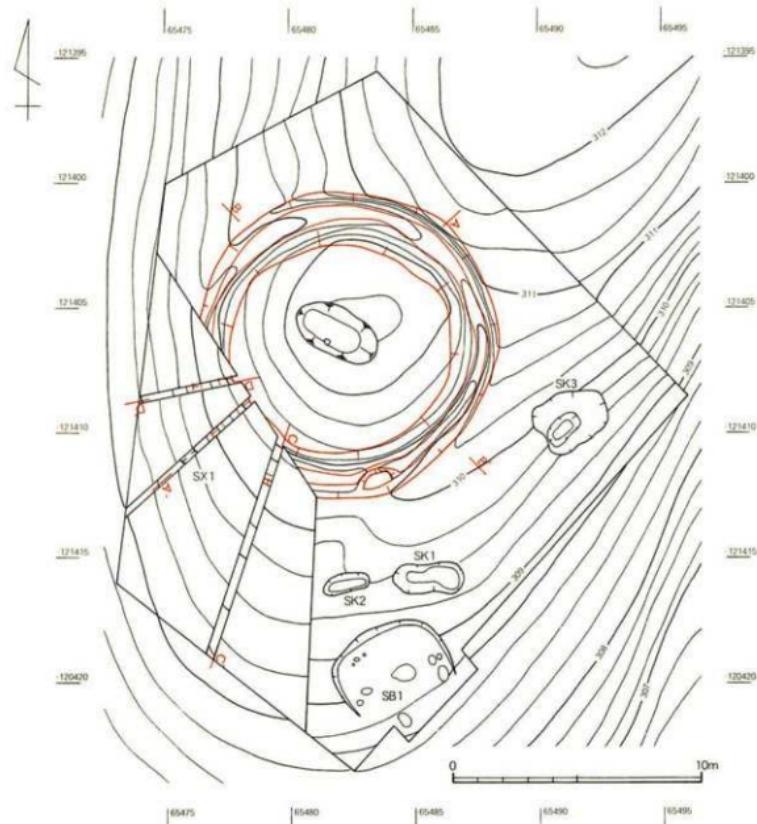


第5図 地形測量図(1:200)

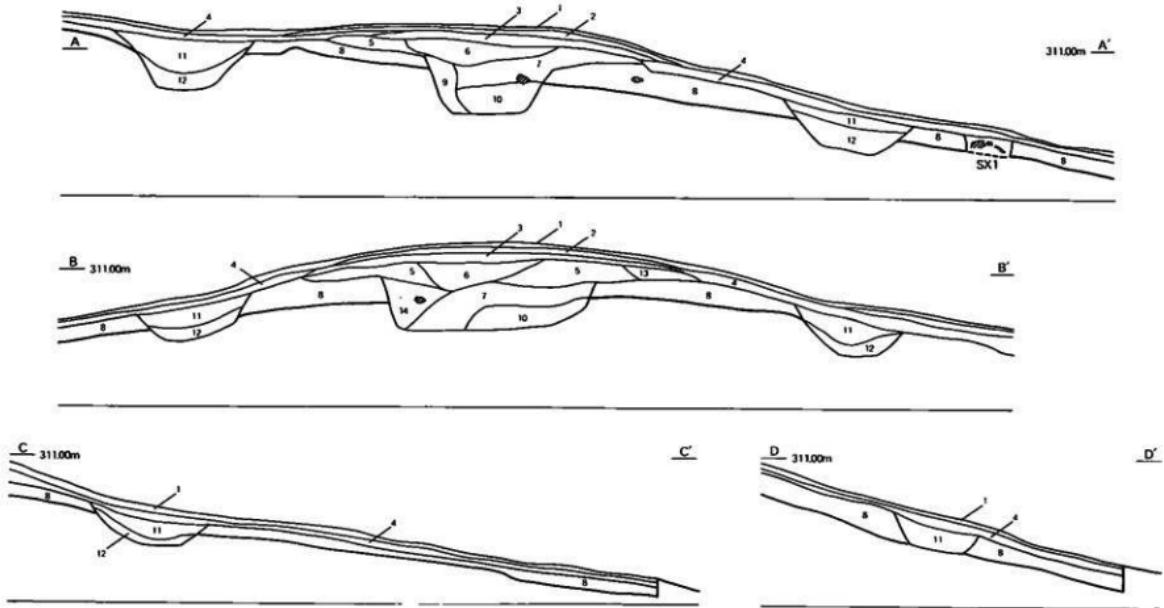
の急斜面になる。南東側は、谷に向かって急斜面となり、南西側は緩やかに尾根の先端へと続く。西から北西側は、谷部に向かって急斜面が続く。調査前の観察では、墳丘の平面形はほぼ円形で、中央よりやや北東側が平坦になっていた。古墳の背面に当たる北東側の尾根に半円状の緩やかな窪みが見られ、周溝の存在が予想された。

#### 墳丘・周溝(第6・7図、図版1b, c・2a, b)

平面形はほぼ円形をしており、中央よりやや北東側に頂部が寄つて、平坦になっている。規模は、直径10~10.5m、周溝底面から墳頂部にかけての高さが、北東側0.7m、南東側1.5m、南西側1.6m、北西側1.2m程度である。墳丘の盛土は、ほぼ流失している。古墳の一部は南西側の民有地に続いていたため、試掘溝(トレーニチ)を3本設け、墳裾の確認を行った。その結果、すべ



第6図 墳丘遺存図・遺構配図(1:200)



## 土種説明

- |                    |                         |                        |
|--------------------|-------------------------|------------------------|
| 1. 表土              | 6. 灰黃褐色土 (地山ブロックを含む)    | 11. 黒褐色土               |
| 2. にぶい黄褐色土         | 7. 黒褐色土 (地山ブロックを多く含む)   | 12. 褐灰色土               |
| 3. にぶい黄褐色土 (2より暗い) | 8. 黒色土                  | 13. にぶい黄褐色土 (3より明るい)   |
| 4. 灰黄褐色土           | 9. にぶい黄褐色土              | 14. 黒褐色土 (地山ブロックを多く含む) |
| 5. 灰黄褐色土 (4より明るい)  | 10. 灰黄褐色土 (地山ブロックを多く含む) |                        |

第7図 塗丘土断面図 (1 : 80)

てのトレンチで周溝が検出でき、周溝が全周することを確認した。周溝の断面はU字型から箱型を呈し、底面はほぼ水平である。南東側では、墳丘上端から周溝底面までの深さは1m程あるが、古墳南西側に向かって溝は浅くなり、南西側の一番深い地点での溝の深さは0.5m程となる。周溝の上端幅は、北東部で2.4m、南東部1.7mで、南西部で2.0m、北西部1.8mで、墳丘北東側が最も広くなる。周溝底面の最高地点は北東部で、ここから東西両方に向かって緩やかに下り、南西側が最低地点になる。

#### 埋葬施設

埋葬施設は、墳頂部での後世の削平によって失われて、確認できず、墳頂中央部に、北西—南東方向に長い楕円形の擾乱坑があった。規模は、長さ3.5m、幅1.5~2.0m、深さ0.9mで、地山の黄褐色土層まで掘り下げられている。石材等は見られなかった。

#### 出土遺物

墳丘頂部中央の擾乱坑内から管玉（第33図-41、図版18-41）1点、石器1点（第34図-47、図版18-47）が出土した。41は碧玉製で長さ1.8cm、径0.65cm、片側から孔が穿たれている。副葬品の一部であったものと考えられる。47は灰白色の流紋岩製の剥片で重さ5.76gである。縄文時代墳のものかと推定される。周溝内から出土した土師器片（図版17-22・23）は、緩やかに湾曲する土師器の甕か壺の胴部で同一個体の可能性がある。

#### その他の遺構

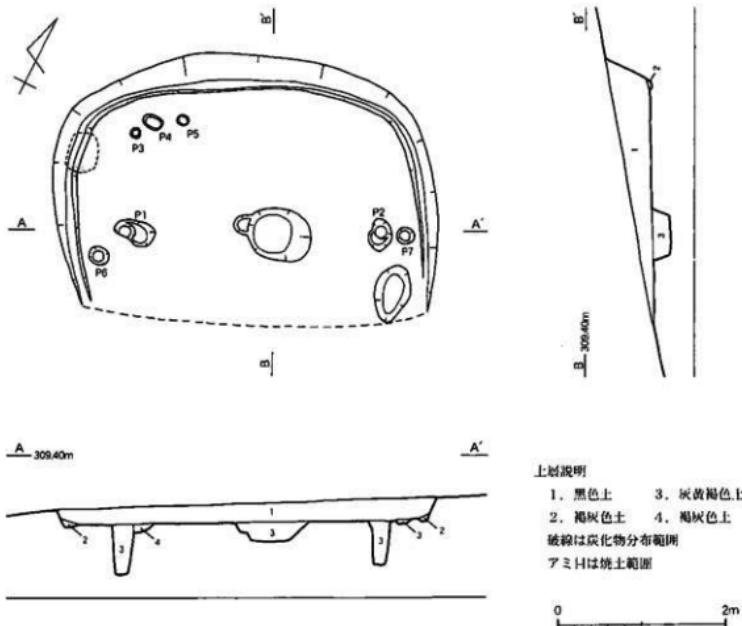
##### S B 1 (第8図、図版3 a, b)

調査区南隅の標高約309m付近に位置する。一辺約4.5mの隅丸方形の堅穴住居跡である。斜面に構築されているため、斜面下方は床面が流出している。このため壁面はコの字状に遺存し、残存する壁面の高さは最大部で0.5m程である。壁面に沿って、幅0.15m、深さ0.06mの壁溝が掘り込まれている。住居跡西隅の部分では、0.4×0.5mの範囲に、炭化物・焼土が分布しているのを確認した。

主柱穴は2基（P 1・2）で、床面中央には浅い土坑がある。このほかに5基の深さ0.1m程度で小規模なビット（P 3～7）検出した。P 1・2の平面形は不整規円形で、いずれも2段掘りである。規模はP 1が長軸0.5m、短軸0.3m、深さ0.62m、P 2が長軸0.4m、短軸0.3m、深さ0.56mである。P 1・2間の距離は、3.1mである。中央の土坑の平面形は、隅丸長方形で、長さ0.75m、幅0.6m、深さ0.23mで、西側に深さ0.1m程度の浅い張り出し部を持つ。この部分はP 3～7と同様のビットの可能性もある。土坑の埋土は灰黄褐色土で、炭化物を含んでおらず、壁面も火熱を受けた痕跡は認められない。このため、炉跡とは言えず、性格は不明である。前述の住居跡西側の壁溝をまたぐ部分で、炭化物の集中と焼土が検出されており、火の使用が認められる。この部分で、火を使用する何らかの作業を行っていた可能性がある。

出土遺物は、弥生土器の甕口縁部破片2点（第31図-27・28、図版18-27・28）と、住居跡の北隅から搔器が1点（第34図-48、図版18-48）出土した。27は、弥生時代後期の甕の口縁部

の破片で、頸部は「くの字」状に強く屈曲して、口縁部を上に向けて拡張させ、端部は三角形状の断面を持つ。口縁部外面には、3条の凹線を施している。28は、同じく後期の斐の口縁部の破片で、頸部で「くの字」状に屈曲して、口縁部を上下に向けて拡張させ、端部は丸みを帯びる。口縁部外面に7条の浅い沈線を施している。27・28とも口縁部に煤が付着している。48は流紋岩製の搔器で、使用痕が認められる。重さ13.55 gである。



第8図 SB 1 実測図 (1:60)

#### SK 1 (第9図、図版3 a, c)

SB 1の北側1 m、調査区南側の標高309.5 mの斜面に位置する。平面形は、ほぼ東西方向に長い楕円形の土坑である。西側にSK 2が隣接する。規模は、長軸2.8 m、短軸1.1 ~ 1.2 m、深さ0.3 ~ 0.7 mである。西端に小さなテラス面がつき、底面は東側が深い。遺物は、弥生時代後期のものと見られる土器破片2点(図版18-29・30)、砥石(第34図-43、図版18-43)が1点出土した。29は斐の口縁部破片で、口縁部に浅い沈線が認められ、SB 1出土の28と同一個体の可能性が高い。29は「くの字状」の頸部から上方に向けて口縁部が延び、外面に凹線が認められる。43は珪質凝灰岩の砥石である。上部を破損したものと見られるが、4面に使用痕(アミ目部分)が認められる。重さは502.0 gである。

**SK 2 (第9図、図版3 a・4 a)**

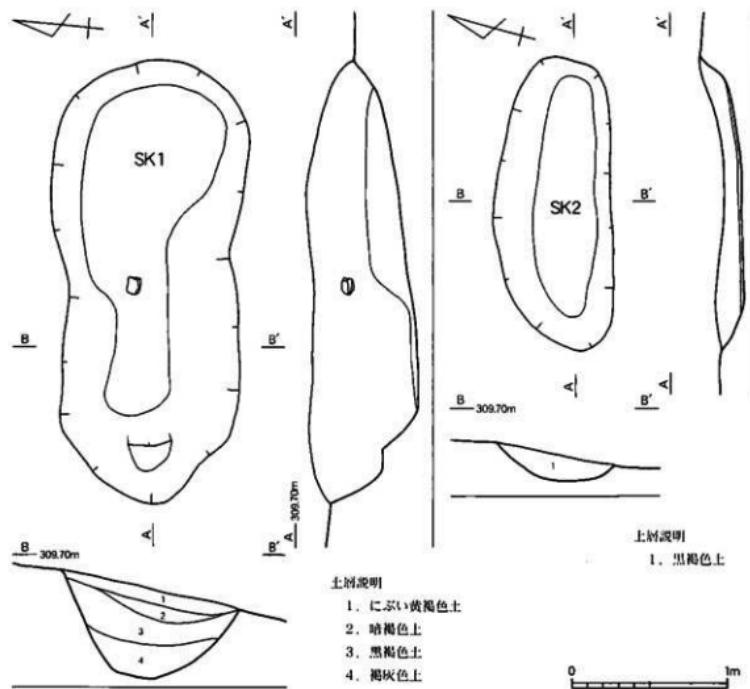
SB 1の北側、SK 1の西側1m、調査区南側の標高309.5mの斜面に位置する。平面形は東西方向に長い梢円形の土坑である。規模は、長軸1.9m、短軸0.8m、深さ0.1~0.2mで、底面は平坦である。遺物は出土していない。

**SK 3 (第10図、図版3 a・4 b)**

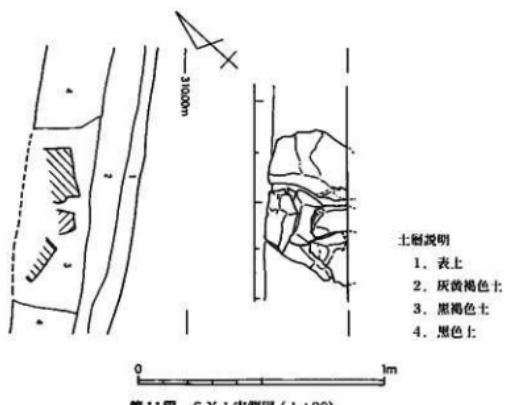
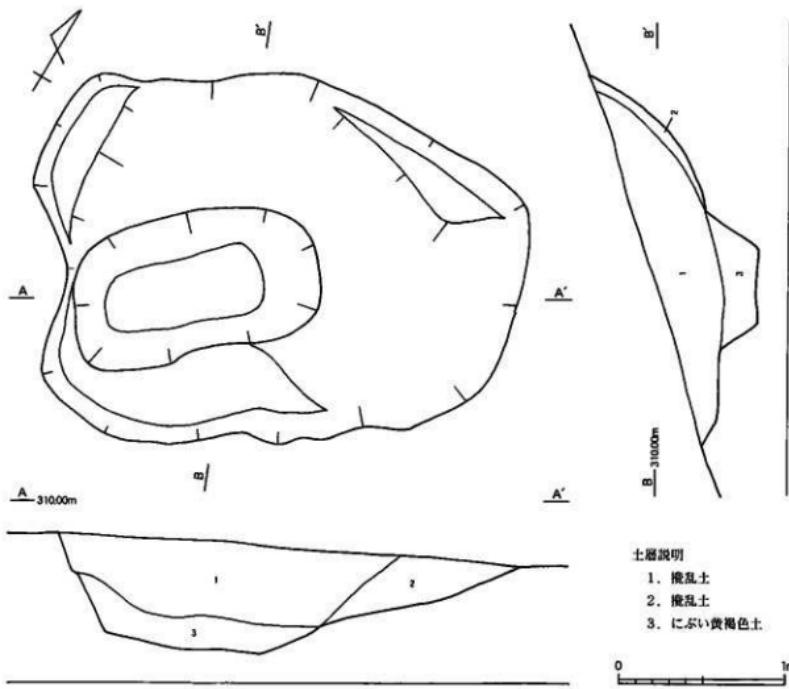
SK 1の北東側6m、調査区東側の標高310mの斜面に位置する。上部は擾乱を受けており、残存する部分の平面形は、隅丸方形の土坑である。残存規模は、長さ1.5m、幅0.9m、深さ0.2~0.3mで、底面は南西側が浅くなっている。遺物は出土していない。

**S X 1 (第11図、図版4 c)**

調査区南西の試掘溝内で確認した造構である。トレンチ調査のため規模は不明であるが、試掘溝断面の観察では、幅0.8m、深さ0.3m以上の黒褐色土の落ち込みを確認した。坑内には砾が詰まっており、底面まで確認できなかった。遺物は出土していない。



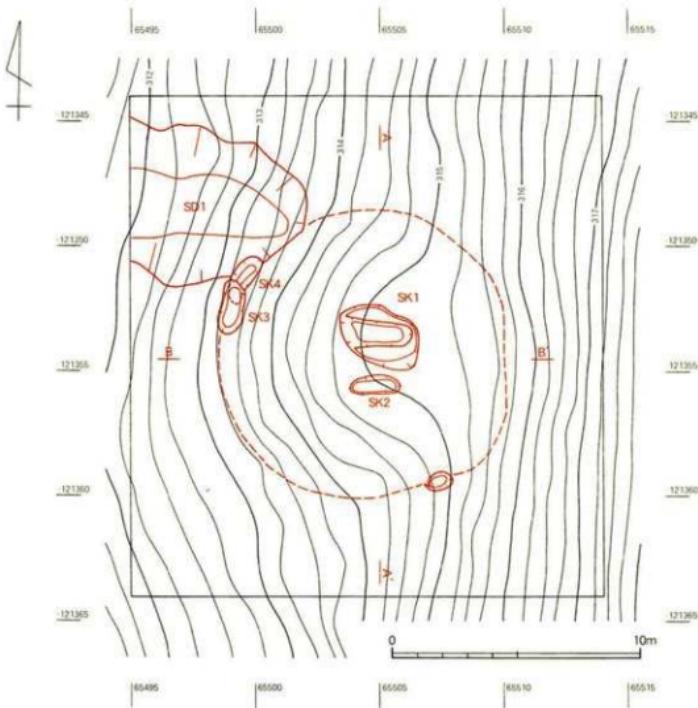
第9図 SK 1, 2実測図 (1:30)



## 2 稲干場第3号古墳

### 立地と調査前の状況（第12図、図版5 a.）

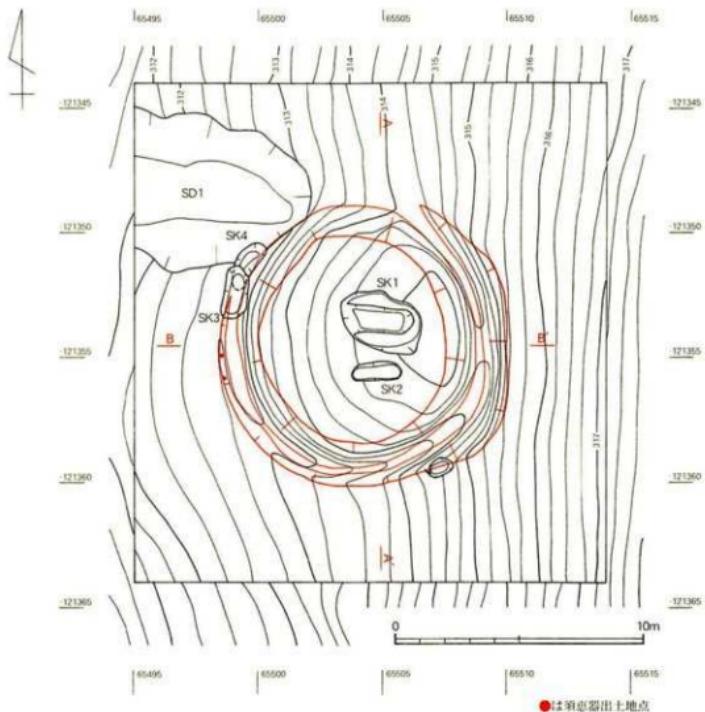
古墳は、標高418mの山塊から北西方向に延びる尾根の西斜面から北西に派生する尾根の西側斜面上に位置する。墳頂部と西側の谷部の標高差は15mである。同尾根上方には、第4号古墳が位置し、南西方向に延びる尾根の先端部には、第1・2号古墳が所在する。立地する斜面の傾斜は、尾根頂部から、約30度の斜面が墳頂部際付近まで続いていた。墳頂部では傾斜角が5度から10度と、比較的緩やかとなり、西側の谷部へ向かって再び急な傾斜が続く。このため、墳丘の北側から南側にかけては、墳丘部で西方向に緩やかに湾曲するものの傾斜角30度前後の急斜面が続く。調査前の地表面観察では、墳丘の平面形はほぼ円形で、見かけの墳丘中央よりやや東側が平坦となっていた。古墳の東側には、緩やかな窪みが認められ、周溝の存在が予想された。



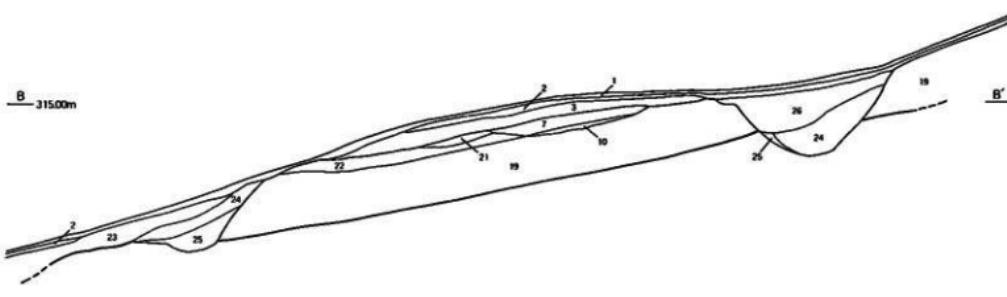
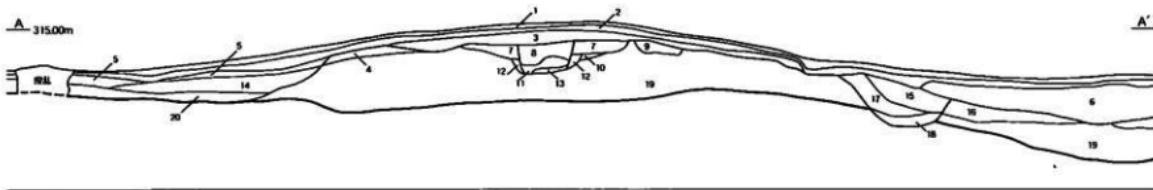
第12図 地形測量図 (1 : 200)

### 墳丘・周溝(第13、14図、図版5b, c・6a~c・7a, b)

墳丘の平面形は、ほぼ円形を呈している。墳頂部は墳丘の中央よりやや東側に寄っており、ほぼ平坦となっている。周溝は墳丘を全周しておらず、北から西部で1/4程途切れている。墳丘の規模は直径10~10.5m、墳頂までの高さが、北側墳裾から1.3m、東側の周溝底面から1.0m、南側の周溝底面から1.7m、西側の墳裾から2.5m程度である。墳丘の盛土は、ほとんど流失していたが、黒褐色土が0.2m程度残存している。周溝の断面はU字型で、底面はほぼ水平である。SD1と接する北西墳裾部1/4は、前述のとおり約16mに亘って陸橋部となり、周溝の全形は、C字状を呈する。周溝の上端幅は東部が2.6m、南部が1.8m、西部が2.3mで、墳丘の南東部で最大となる。周溝底面の最高地点は東部で、ここから南北両方に向かって緩やかに下り、谷側の西底面が最低地点になる。墳丘北西のSD1は調査区外の西側に続いている。また、SD1と墳裾が接する部分に2基の土坑(SK3・4)が設けられていた。



第13図 墳丘遺存図・遺構配置図(1:200)



- 22 -

上部説明

- |                 |                         |                        |
|-----------------|-------------------------|------------------------|
| 1. 表土           | 10. 灰黄褐色土 (地山ブロックを含む)   | 19. 黑褐色土               |
| 2. にぶい黄褐色土      | 11. 灰黄褐色土 (地山ブロックを多く含む) | 20. 黑褐色土 (地山ブロックを含む)   |
| 3. 黑褐色土         | 12. 黑褐色土 (地山ブロックを多く含む)  | 21. 灰黄褐色土              |
| 4. 黑褐色土 (3より暗い) | 13. 灰黄褐色土 (地山ブロックを少々含む) | 22. 黑褐色土 (地山ブロックを少々含む) |
| 5. 灰黄褐色土        | 14. 黑褐色土                | 23. 喀褐色土               |
| 6. 黑色土          | 15. 黑褐色土                | 24. 黑色土                |
| 7. 黑褐色土 (3より暗い) | 16. 間灰色土                | 25. 黑褐色土 (地山ブロックを含む)   |
| 8. 灰黄褐色土        | 17. 喀褐色土                | 26. 喀褐色土               |
| 9. にぶい黑褐色土      | 18. 黑褐色土 (地山ブロックを含む)    |                        |

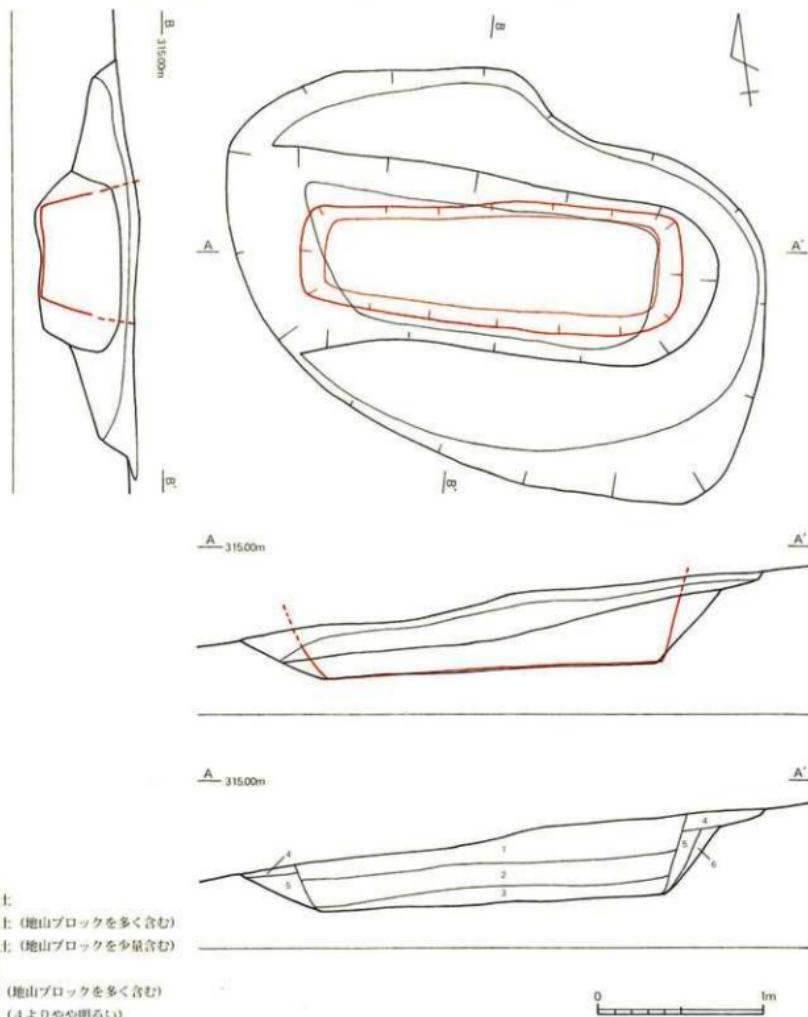


第14図 填丘土剖面図 (1:80)

## 埋葬施設

SK 1 (第15図、図版7c)

墳頂部の中央からわずかに北寄りに位置する。掘方の平面形は、ほぼ東西に長い不定形で、二段掘りとなっている。規模は、長さが3.5m、幅は2.1～2.2m、残存する深さは0.3～0.5mである。

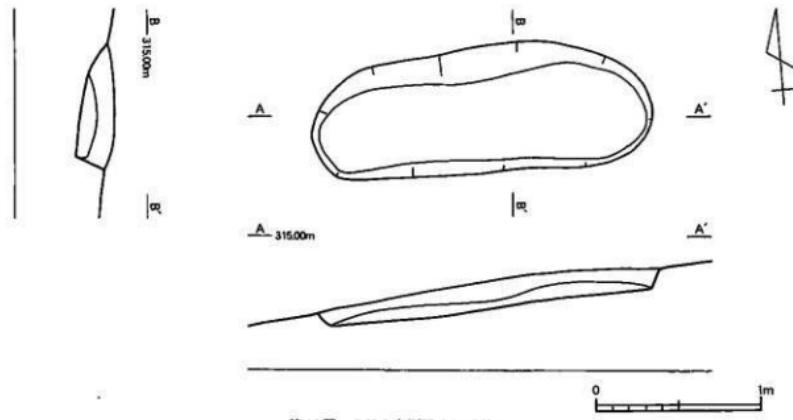


第15図 SK 1実測図 (1:30)

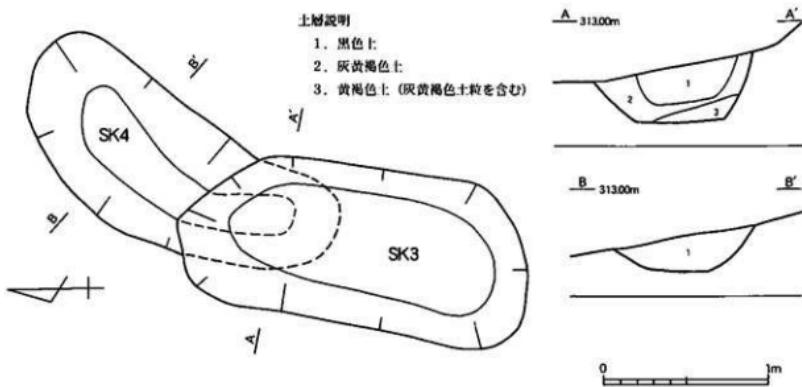
坑内中央に木棺を設置していたものと考えられ、長さ2.3m、幅0.6~0.7m部分に1~3層の堆積が見られた。広く掘った坑内に、木棺を設置し周囲を埋めたものか、または周囲を埋めて木棺設置用の坑を準備したかのいずれかと考えられる。木棺設置部の東側の幅が0.7mとやや広く、頭位は東側の可能性が考えられる。底面はほぼ平坦であるが、わずかに西に傾斜している。遺物は出土していない。

#### SK 2 (第16図、図版8 a)

墳頂部のSK 1の南側に並行して位置する。平面形は、ほぼ東西に長い楕円形の土坑である。規模は、長さ2.1m、幅0.5~0.8m、残存する深さ0.2m程度である。底面は北から南及び東から西に向かって傾斜している。埋土はにぶい黄褐色土で、木棺等の痕跡は確認できなかった。遺物は出土していない。



第16図 SK 2 実測図 (1:30)



第17図 SK 3, 4 実測図 (1:30)

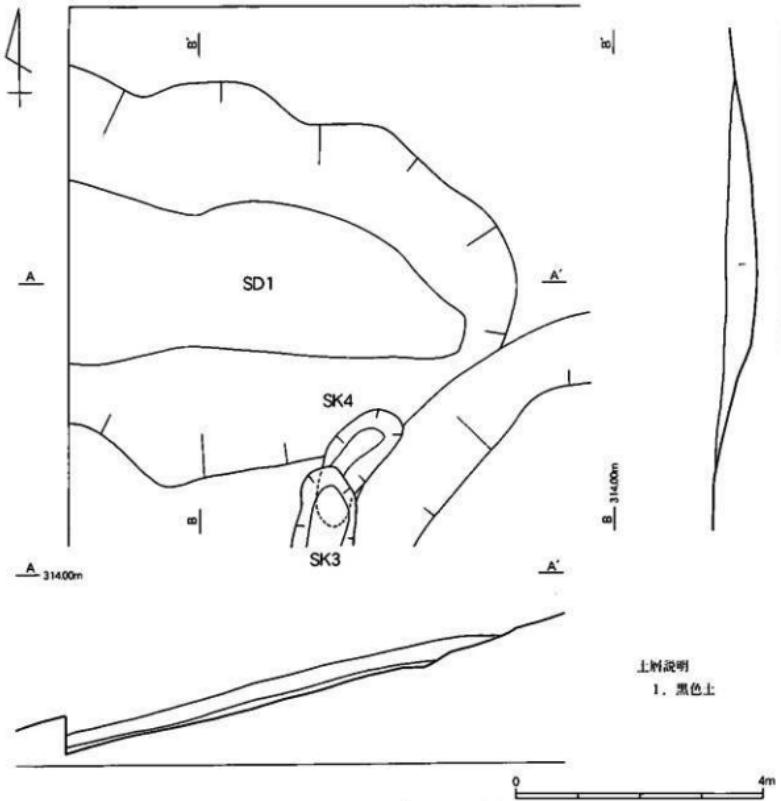
### 古墳に付属する造構

#### SK 3 (第17図)

SD 1 と墳丘北西の墳裾が接する部分に位置する。平面形は南北に長い椭円形の土坑で、北部が SK 4 と重複しており、2 / 3 程が残存している。土層観察から、SK 3 が SK 4 より古いことを確認した。残存する規模は、長軸 2.2 m、短軸 0.9 ~ 1.0 m、深さは 0.4 m 程で、底面はほぼ平坦である。遺物は出土していない。

#### SK 4 (第17図)

SK 3 の北側に位置する。平面形は長椭円形で、南側で SK 3 と重複し、2 / 3 程度が残存している。土層観察から、新旧関係は SK 4 が SK 3 より新しい。残存する規模は、長軸約 1.4 m、短軸 0.9 m、深さ 0.2 m 程で、底面はほぼ平坦である。遺物は出土していない。



第18図 SD 1 断面図 (1 : 80)

### SD 1 (第18図)

墳丘北西部の周溝が切れた地点を起点として、西に向かって、斜面下方に延びていく。西端は調査区外となるため不明である。溝の底面は緩やかに西に向かって傾斜する。規模は、墳丘裾から西側調査区壁までの長さ7.3m、幅は東側の墳丘裾との接点部分が2m程で、最大幅は6.5mである。深さは東端で0.8m、西調査区壁際で0.3mである。造構の東端底部は墳丘西側の周溝底面より低くなる。埋土は黒色土である。遺物は出土していない。本古墳に伴う墓道の可能性も考えられる。

#### 出土遺物

西側周溝部から須恵器杯蓋(第30図-2・3、図版17-2・3)、杯身(第30図-5・6、図版17-5・6)、高杯(第30図-4、図版17-4)が出土した。2・3は、やや平坦な天井部から一条の凹線を画して外下方へと体部が延び、口縁部に至る。口縁部はやや内側へ屈曲して外下方へ延びる。端部は尖り気味に納めている。いずれも焼きひずみが見られる。5は底部に丸みを持ち、湾曲しながら体部が延び、外反して受部に至る。受部は若干肥厚し尖り気味に端部を納める。立ち上がりは直線的に内上方へ延び、受け部との境には凹部がわずかに見られる。6は杯身の受部破片で、受部は若干肥厚し尖り気味に端部を納める。立ち上がりは直線的に内上方へ延び、受部との境には凹部が見られる。4は杯部の底面がやや丸く体部外面に凹線が2本認められる。口縁部はやや外反し、端部は尖り気味に納める。脚部は外反しつつ下方へ延び、下部の3箇所に径6~7mmの円形の透かしが外側から穿孔されている。脚部から脚底部の接点で、外に向かって強く外方向に屈折し、2本の凹線を有する。凹線から脚底に向かって、屈曲し外反しつつ直線的に延びていく。欠損により脚端部の形状は不明である。

墳丘周辺から短頸壺(第30図-1、図版17-1)が出土した。丸みを帯びた底部から内湾して立ち上がる胴部に、やや屈曲して内傾して直線的に伸びる肩部が続く。口縁部は欠損しているが、頸部から口縁部への立ち上がりは、やや外反しているようである。底部に焼成後の穿孔がある。

第2表 稲干塚第3号古墳出土須恵器観察表

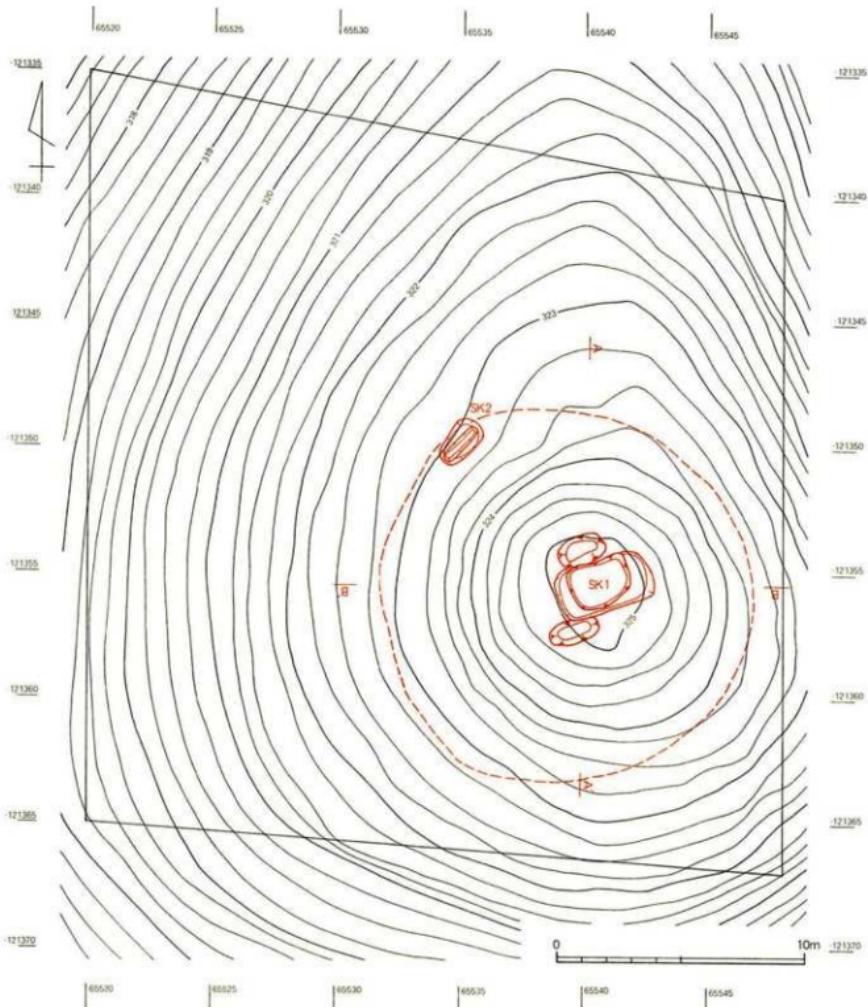
遺物 番号	材種	法寸 (cm) 口径 高さ		調整	色調	胎土	焼成	備考
		外側	内側					
1 灰陶盃	/	/	外側：口縁～体部上部回転ナデ、体部下部ヘラ削り 内側：回転ナデ	内外面：灰褐色	1mm程度の砂粒を少量含む	良好	底盤に径5.0cmの穿孔	
2 杯蓋	14.2	4.2	内外：回転ナデ、天井外輪ヘラ切り後ナデ・内面ナデ	内外面：灰褐色	1mm程度の砂粒を含む	良好	大粒の砂粒あり	
3 杯蓋	12.7	4.5	内外：回転ナデ、天井外輪ヘラ切り・内面ナデ	内外面：灰褐色	1~4mm程度の砂粒を含む	良好		
4 高杯	10.8	/	回転ナデ、底盤外底面回転ヘラ削り、接合後内外共ナデ	内外面：灰褐色	1mm程度の砂粒を含む	良好	脚部に円形の透かしあり	
5 杯身	12.8	4.6	内外：回転ナデ、底盤外輪ヘラ切り・内面ナデ	内外面：灰褐色	1~3mm程度の砂粒を少量含む	良好		
6 杯身	/	/	内外：回転ナデ	内外面：灰褐色	1mm程度の砂粒を少量含む	良好		

調査区内からは、縄文時代の土器片1点(第31図-32、図版18-32)、砥石1点(図版18-44)、石斧1点(第34図-46、図版18-46)、石核1点(図版18-49)、剥片1点(図版18-50)、鉄滓(図版18-39・40)が数点出土している。32は口縁部付近の破片で、突帯に刻み目が施されている。44は珪質凝灰岩製の砥石で、断面はほぼ方形で、折損している。重さは179.36gで、全面に使用痕が見られる。46は細粒凝灰岩製で、折損している。断面は楕円形で、重さは97.51gである。49、50は共に石材はチャートで、重さは49が6.33g、50が3.98gである。

### 3 稲干場第4号古墳

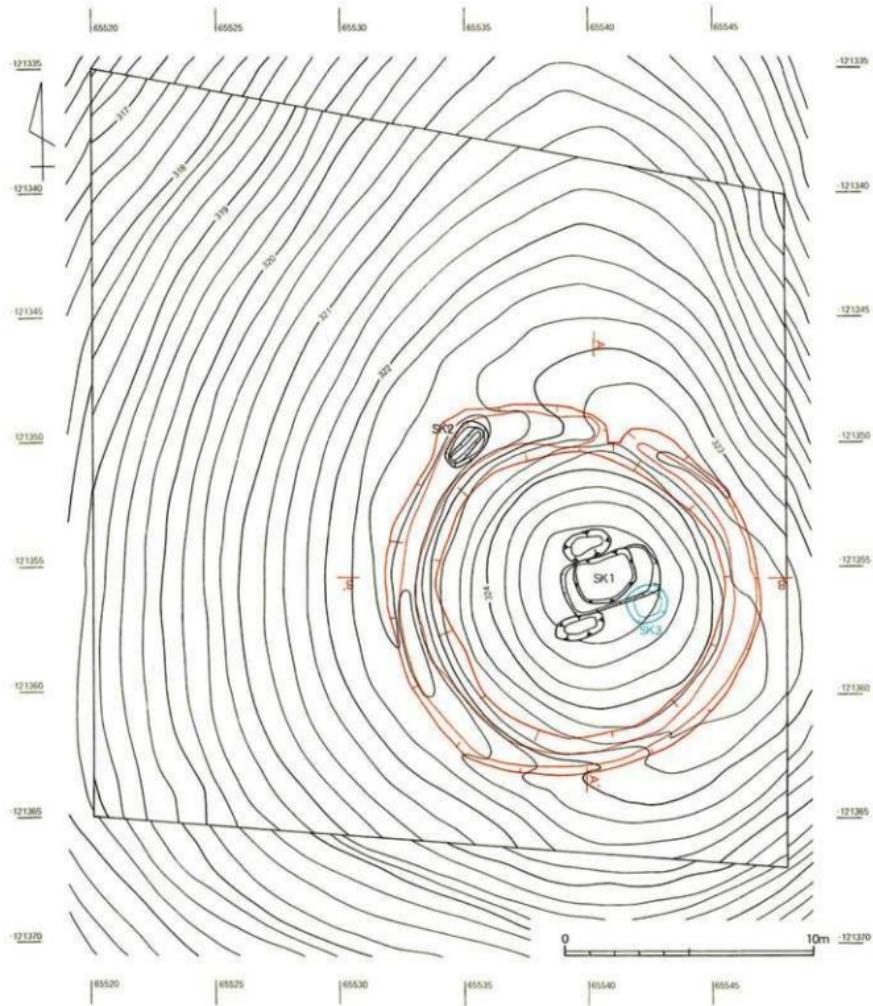
立地と調査前の状況（第19図、図版9 a）

古墳は、第2・3号古墳と同じ尾根の頂部に位置している。墳頂部の標高は325mで、西側の

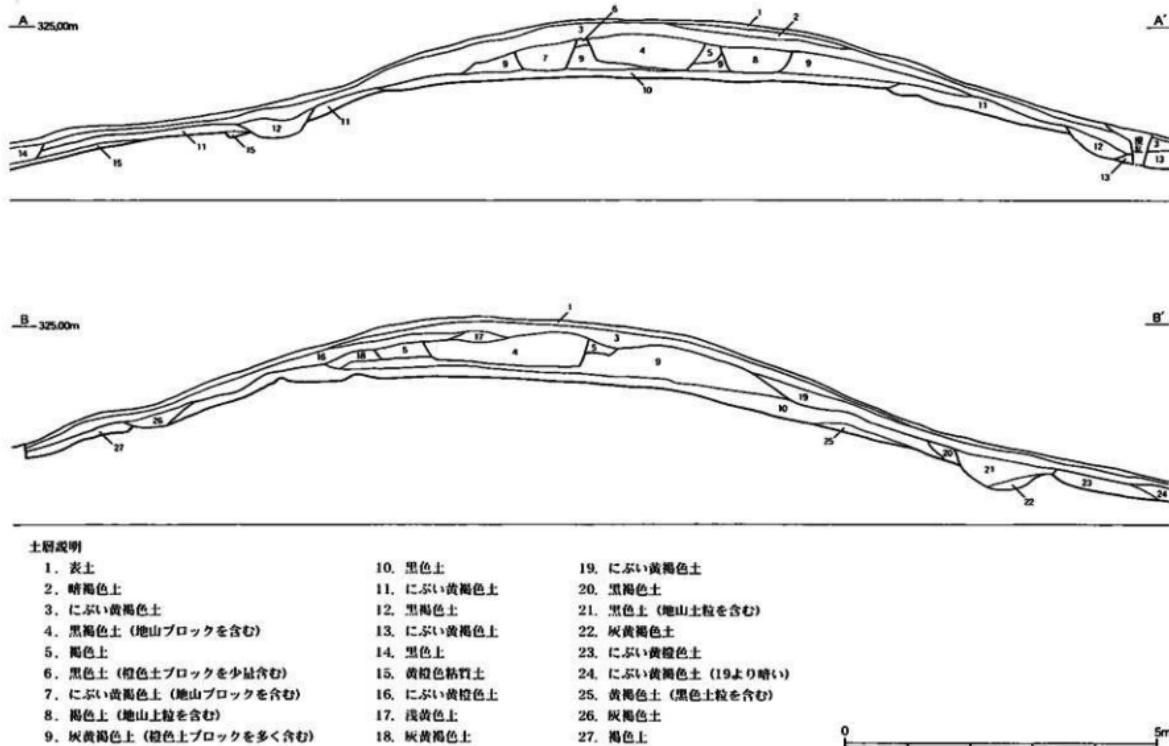


第19図 地形測量図 (1:200)

谷部との標高差は約19mである。墳丘北側には尾根稜線の緩やかな平坦部が6m程続き、やがて北東側が緩やかな斜面になっていく。南側では、地表で確認できる墳丘の裾から傾斜角13度程度の斜面がしばらく続き、やがて30度を超える急斜面になり南東の谷部へと続いていく。調査前の



第20図 墳丘遺存図・造構配図(1:200)



第21図 墳丘土層断面図（1:80）

観察では、墳頂部は平坦で、直径約12m、高さ1m程の墳丘と推定された。墳丘の周囲に溝状の窪みは確認できなかった。

#### 墳丘・周溝(第20、21図、図版9b, c・10a, b, c)

墳丘の平面形は、ほぼ円形を呈しており、ほぼ中央が平坦となっている。墳丘の規模は直径13.0～13.5m、墳頂までの高さが、北側の周溝底面から1.7m、西側2.2m、南側1.6m、東側1.5mである。周溝は墳裾をほぼ一周するが、北側で一部途切れる。周溝の上端幅は北部が1.2m、東部が1.7m、南部が1.1m、西部が1.1mで、墳丘の北西部で周溝の幅は最大となる。周溝底面の最高地点は東部で、ここから南北両方に向かって緩やかに下り、谷側(西側)が最低地点になる。墳丘の盛土は大半が流出しているが、灰黄褐色土が最大で0.5m残存していた。

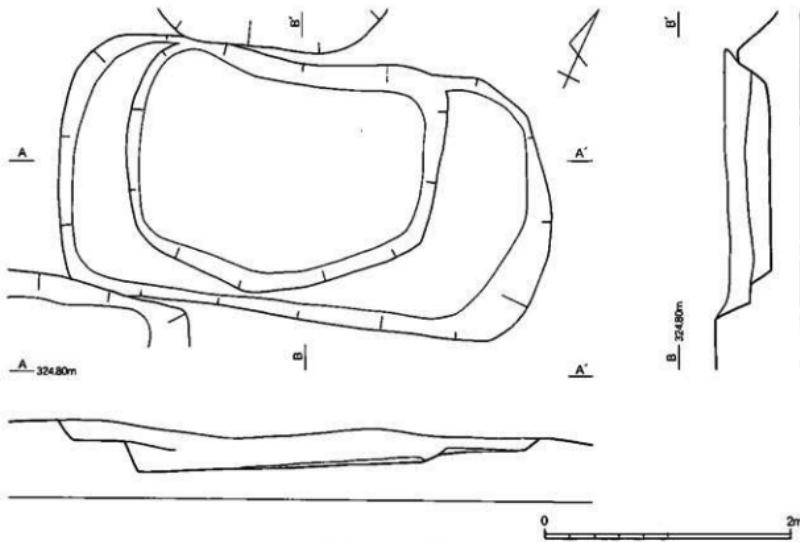
#### 埋葬施設

##### SK 1(第22図、図版11a)

墳頂部のほぼ中央に位置する。平面形は隅丸長方形の土坑で、南北両側と中央部に後世の削平を受けている。主軸は、東北東～西南西である。規模は、長さ3.9m、幅2.0～2.2m、残存する深さ0.1～0.2cmである。埋土は、黒褐色土で、木棺の痕跡等は認められなかった。出土遺物は石器が1点出土したが、埋葬に伴うものではない。

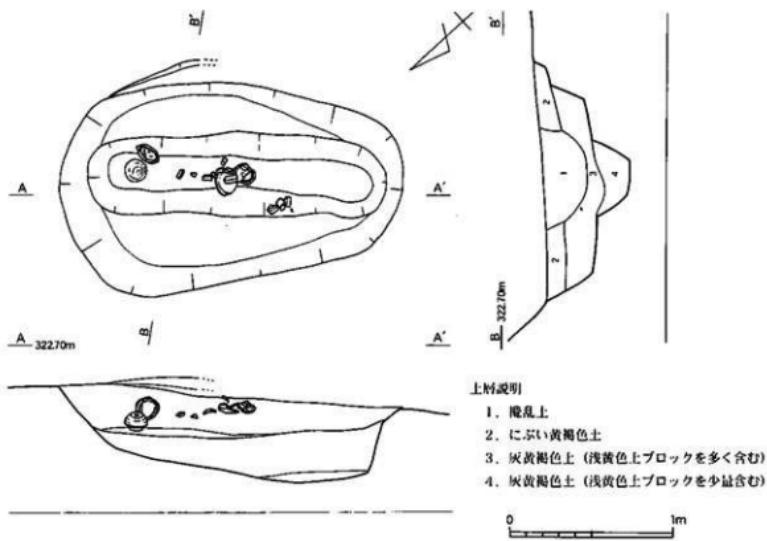
##### SK 2(第23図、図版11b, c・12a, b)

北西側周溝の底面に位置する埋葬施設と考えられる。上面は削平されているものの、平面形は



第22図 SK 1実測図(1:40)

歪んだ楕円形の二段掘りの土坑で、東側は一部三段となっているようである。主軸は北東—南西方向で、残存する規模は、長軸2.1m、短軸0.8~1.3m、深さは0.3m程である。下段は細長い隅丸長方形で、長さ1.8m、幅0.5m、深さ0.2m程の規模をもつ。底面は北から南に傾斜している。下段の埋土は、灰黄褐色土であるが、木棺の痕跡は認められなかった。坑内の中央から北側で下段上面よりも上の部分から、須恵器の短頸壺や壺蓋、杯蓋、杯身が出土した。下段の坑内に木棺が納められていたとするならば、これらの須恵器は棺外上面に副葬されたものと考えられる。須恵器のほかに下段土坑内から鉄鏃が出土している。頭位は、土坑の幅が広く、須恵器が出土している北側と考えられる。



第23図 SK 2・尖端図 (1:30)

#### 出土遺物

墳丘頂部のSK 1からは遺構に伴うものではないが、石器が1点(第34図-51、図版18-51)出土した。周溝内のSK 2からは、須恵器の小型短頸壺(第30図-11、図版17-11)、壺蓋(第30図-8、図版17-8)、杯蓋(第30図-9・12、図版17-9・12)、杯身(第30図-14・15、図版17-14・15)、鉄鏃3点(第32図-35~37、図版18-35~37)が出土している。そのほか周溝からは須恵器の甕(第30図-20、図版17-20)、土師器の甕(第30図-24・25、図版17-24、18-25)が出土した。また、墳丘上から須恵器の壺蓋(第30図-7、図版17-7)、杯蓋(第30図-10、図版17-10)、杯身(第30図-13・18・19、図版17-13・18・19)、甕の口縁部片(第30図-16・17、図版17-16・17)、甕の胴部片(第30図-21、図版17-21)などが出土している。7と8は、口径が10cm前後で他の杯蓋より小型であり、短頸壺の蓋と考えられる。

られる。丸い天井部から外下方へと体部が延び、口縁部に至る。口縁部はやや外下方へ延びる。端部は尖り気味に納めている。9・10は、丸い天井部から外下方へと体部が延び、段を画して口縁部に至る。9の口縁部はやや外反し、10の後円部はやや内湾気味で、端部はいずれも尖り気味に納めている。ともに天井部に焼きひずみが認められる。13は、体部から口縁部の破片である。湾曲する体部が受部に至り、受部は若干肥厚し、外上方に向て尖り気味に端部を納める。立ち上がりは直線的に内上方へ延び、受部との境には凹部がわずかに見られる。口縁部内面は凹線状になり、端部は尖り気味に納めている。14は口径が12cmと小さく、底部は丸みを持ち、湾曲しながら体部へ延び外反して受部に至る。立ち上がりは内上方へ直線的に延び、受部との境には凹部が見られる。口縁端部は厚みを減じ直立する。15はほぼ平坦な底部から湾曲しながら体部へ延び、外反して受部に至る。受部端は尖り気味に納める。立ち上がりは内上方へ直線的に延び、受部との境には凹部が見られる。立ち上がりから口縁部へは厚みを増すが、端部は直立して尖り気味に納めている。18・19は、口縁部が欠損する破片で、18は平坦な底部をもつ。19は底部が欠損している。共に湾曲しながら体部へ延び、やや外反して受部に至る。受部は端を尖り気味に納める。立ち上がりは内上方へ直線的に延び、受部との境には凹部が見られる。短頸壺11は、丸みを帯びた底部から内湾して立ち上がる体部に、屈曲して直線的に延びる肩部が続く。肩部から口縁部へほぼ垂直に立ち上がる。16・17は壺の口縁部の破片で、16は口頸部が外反し、口縁先端で屈曲して短く上方へ延びる。口縁端部に2条の凹線を施す。17は、口頸部が外反し、口縁先端で屈曲して短く上方へ延びる。先端は丸く納める。口縁端部に2条の凹線を施す。20・21は妻の体部の破片で、緩やかに湾曲し、外面はタカキ板で叩き締められ簾状の圧痕が残り、内面にはあて具の同心円状の圧痕が認められる。35～37は鉄鑄である。35は鋳造が著しいため関部が不明確であるが、片刃鑄の鎌身部から笠被部と見られる。笠被部の表面に木質が確認できる。残存長6.4cm、鎌身幅1.0cm、厚さ0.3cm、重さ10.45gである。36は鉄鑄の茎部片で、残存長4.5cm、幅0.5cm、厚さ0.2cm、重さ4.03gである。37は脇抉柳葉式鉄鑄の鎌身部である。残存長4.5cm、残存幅2.4cm、重さ7.46gである。鎌身部の逆刺部及び茎部は、折れて欠落している。土師器の妻24・25は土師器妻の体部から口縁部にかけての破片で、器壁は厚く頸部で「くの字」状に屈曲し、外上方に直線的に延びる。

第3表 稲干場第4号古墳出土須恵器観察表

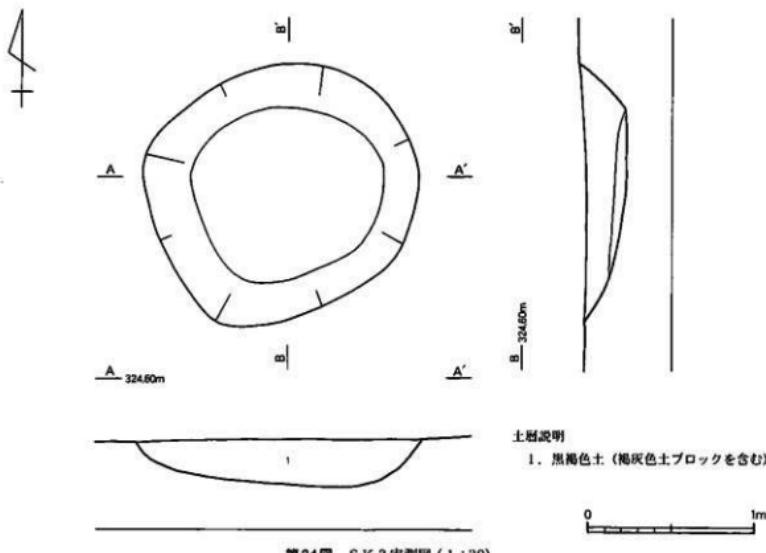
追跡番号	器種	法皇(cm) 口径 高さ	調査		色調	職土	焼成	備考
			内外：回転ナデ	天井外面へラ切り				
7	壺蓋	11.2 4.1	内外：回転ナデ	天井外面へラ切り	内外面：灰色	1～3mm程度の砂粒を少量含む	良好	
8	壺蓋	10.2 3.2	内外：回転ナデ	天井外面へラ切り後ナデ	内外面：灰色	1mm程度の砂粒を少量含む	良好	
9	壺蓋	15.1 4.8	内外：回転ナデ	天井外面へラ切り後ナデ	内外面：灰色	1～3mm程度の砂粒を少量含む	良好	
10	壺蓋	15.2 5.2	内外：回転ナデ	天井外面へラ切り後ナデ	内外面：灰色	1～3mm程度の砂粒を少量含む	良好	
11	短頸壺	7.2 9.8	内外：回転ナデ	底部外面へラ切り後ナデ	内外面：灰色	1mm程度の砂粒を少量含む	良好	外面一部自然釉
12	壺蓋	16.8 /	内外：回転ナデ		内外面：灰色	1mm程度の砂粒を少量含む	良好	
13	环身	11.8 /	内外：回転ナデ		内外面：灰色	1mm程度の砂粒を少量含む	良好	
14	环身	10.3 1.9	内外：回転ナデ	底部外面へラ切り後ナデ・内面ナデ	内外面：灰色	1～5mm程度の砂粒を少量含む	良好	外底面にヘラによる一本線あり
15	环身	13.6 5.6	内外：回転ナデ	底部外面へラ切り後ナデ・内面ナデ	内外面：灰色	1mm程度の砂粒を少量含む	良	
16	直口縁壺	13.5 /	内外：回転ナデ		内外面：灰色	1mm程度の砂粒を少量含む	良好	
17	直口縁壺	13.1 /	内外：回転ナデ		内外面：灰色	1mm程度の砂粒を少量含む	良好	
18	环身	/	内外：回転ナデ	底部外面へラ切り後ナデ・内面ナデ	内外面：灰色	1～3mm程度の砂粒を少量含む	良好	外側一部自然釉
19	环身	/	内外：回転ナデ		内外面：灰色	1mm程度の砂粒を少量含む	良好	
20	妻	/	外面：打手タタキ、内面：同心円タタキ		内外面：灰色	1mm程度の砂粒を含む	良好	
21	妻	/	外面：打手タタキ、内面：同心円タタキ		内外面：灰色	1mm程度の砂粒を含む	良好	

口縁部端付近で外反し、端部は丸く納める。24の口縁部には、煤（アミ目範囲）が付着している。51は黒曜石の剥片で、長さ2.2cm、幅1.0cm、厚さ0.3cm、重さ0.47gである。

#### その他の遺構

##### SK 3 (第24図、図版12c)

墳丘の下層から検出された土坑である。墳頂部の南東寄り位置し、平面形は歪んだ円形で、規模は直径1.6～1.7m、残存する深さは0.2～0.3mである。埋土は黒褐色土一層である。遺物は出土していない。



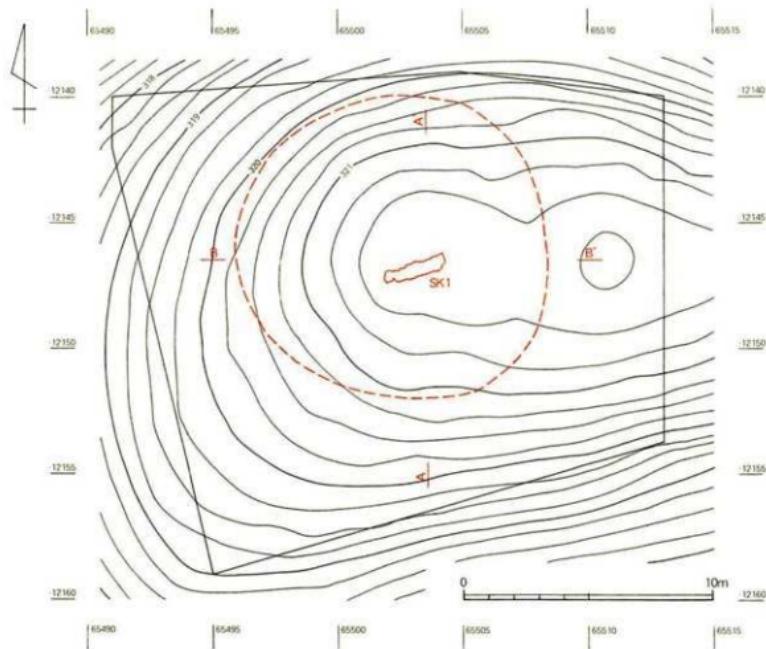
第24図 SK 3 実測図 (1:30)

調査区内から、縄文土器片1点（第31図-33、図版18-33）、弥生土器片1点（図版18-31）が出土した。33は口縁部の破片で、内外面に梢円形の押型文が施されている。31は、外面に刺突による列点文が見られる。

#### 4 稲干場第9号古墳

##### 立地と調査前の状況(第25図、図版13a)

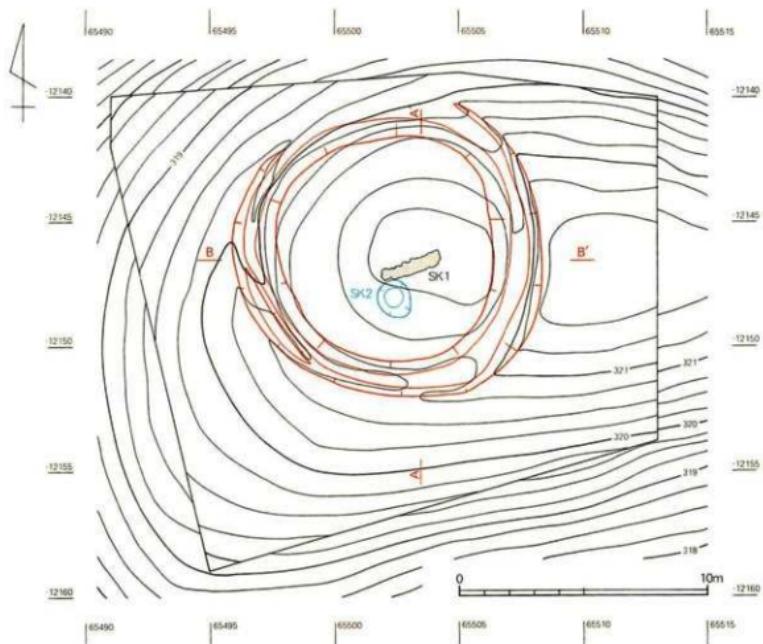
古墳は、標高418mの山塊から北西方向に延びる尾根の西斜面から西方向に派生する尾根先端部に立地する。谷を挟んで第3号古墳の北約100mに位置しており、今回調査の4基のうち最も北に所在する。墳頂部の標高は約321.5mで、古墳と北側谷部との標高差は約12mである。古墳の東側はこの小尾根の頂部になっており、墳頂部よりも若干高くなっていた。古墳の北側及び南側は墳丘裾部から急傾斜の斜面になっており、それぞれ南北の谷部へと続いている。尾根筋は南西方向に延びており、北及び南側の斜面より傾斜は緩くなっていた。調査前の地表面観察では、墳頂部の中央で埋葬施設に利用された可能性のある石材の一部分が露出していた。このことからは、墳丘上面の盛土の流出によって石材が露出したか、後世の掘削によって埋葬施設の破壊が行われ石材が露出したかの可能性が考えられた。また、古墳の東側の尾根頂部は、前述のとおり墳頂部よりも高くなっていたり、墳頂部と尾根頂部の間は浅く窪んだ状態で南北に続き、少なくとも古墳を半周程度する周溝の存在が予想された。



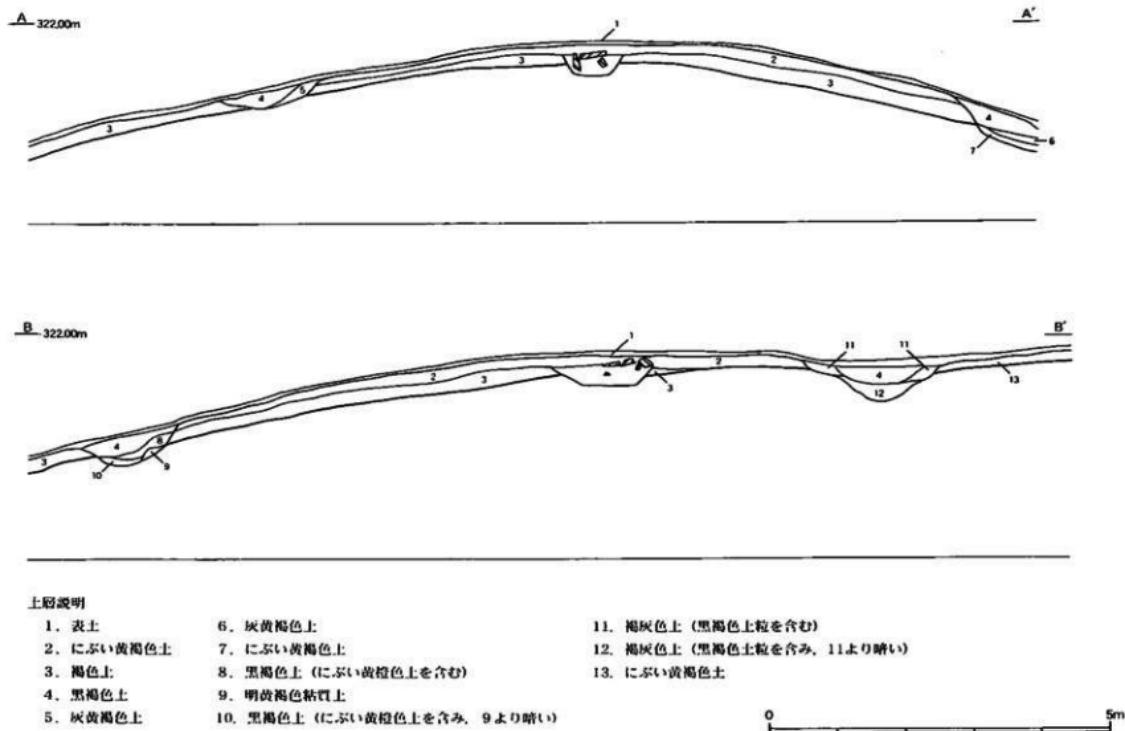
第25図 地形測量図(1:200)

**墳丘・周溝(第26・27図、図版13b, c・14a～c・15a, b)**

墳丘の平面形は、ほぼ円形を呈している。墳丘の中央より、やや東側に墳頂部が寄って平坦となっていた。墳丘の規模は直径10.4～10.6mである。墳頂までの高さは、北側の古墳裾から3.8m、南側の周溝底面から2.4m、西側の周溝底面から4.9m、北側の周溝底面から1.8mである。見かけの高さは、西側が最も高くなっている。墳丘の盛土は、地表面観察でうかがえたように、流出が著しく、にぶい黄褐色土が0.2m残存している程度である。本来は、墳丘東側の尾根頂部よりも高く盛土が施されていたものと考えられる。周溝の断面はU字型で、底面はほぼ水平である。全周しておらず、北北西から北部の1/6は約5mに亘って途切れ、周溝の全形はC字状を呈する。周溝の上端幅は、東部が2.2m、南部が1.5m、西部が1.5mとなっており、墳丘の東側で周溝の幅は最大となっている。周溝底面の最高地点は東側で、ここから南北両方向に緩やかに下り、西側が最低地点になる。



第26図 墳丘遺存図・遺構配置図(1:200)



第27圖 塗丘上断面図 (1:80)

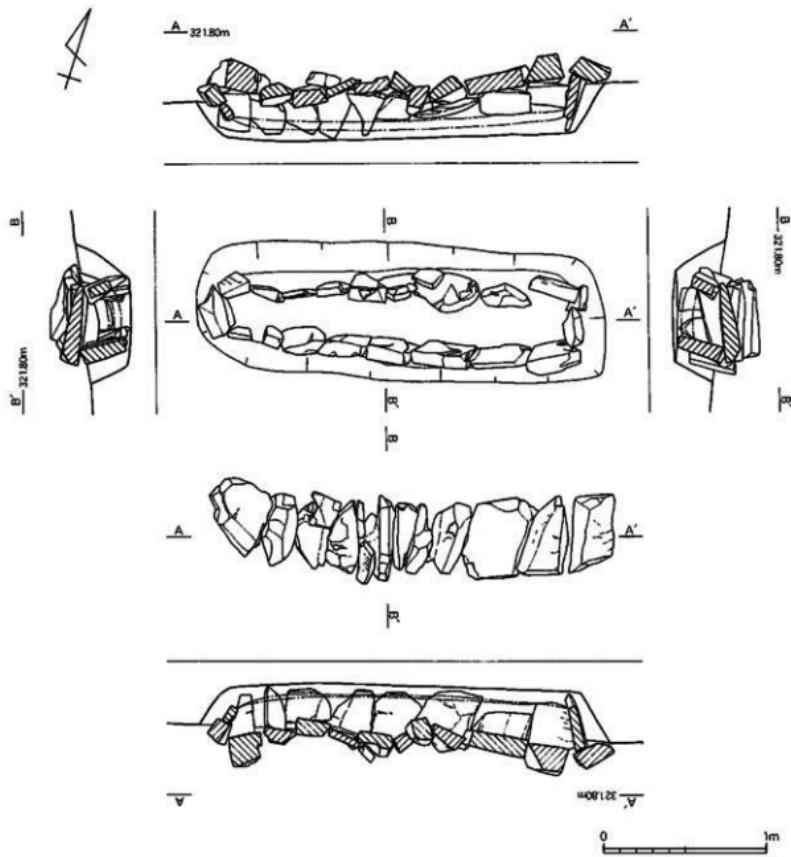
### 埋葬施設

#### S K 1 (第28図、図版15c・16a～c)

S K 1は、墳頂部中央からやや南寄りに位置する箱式石棺墓である。主軸方位はN 70° Eである。墓坑の平面形は隅丸長方形で、長さ2.5m、東端幅0.75m、西端幅0.7m、最大幅0.84m、深さ0.25～0.3mの規模である。蓋石をはじめ、全ての石材が完存しているものと考えられるが、東端の2枚の蓋石は、蓋石の間に隙間ができるおり、少し移動している。その他の蓋石の石材間にも隙間が見られるが、粘土による目貼り等は施されていなかった。石棺内には土砂が流入し、人骨は遺存していないかった。蓋石は計11枚の石材からなり、東側に大きな石材を配し、中央から西側に、やや小ぶりな板石を用いている。長辺33～54cm、短辺25～37cm、厚さ10～17cmの大型の石材を、西端と東小口側に3枚置き、東側から4、7～10枚目に、長辺36～44cm、短辺20～24cm、厚さ6～10cmの石材を配する。石棺ほぼ中央部の東から5、6枚目には、長辺40～42cm、短辺11～13cm、厚さ7～13cmの小ぶりな石材を用いている。石棺の内法寸法は、長さ2.34m、最大幅0.57m、東小口の幅0.46m、西小口の幅0.35mである。頭位は、西小口側の幅が最も狭く、東に向けて広くなることや、東側の蓋石に大きな石材を用いていることなどから、東小口側であったものと考えられる。小口石と側石の接する部分は、西小口が小口石と側石の角を合わせ、東小口の南側は小口石を挟み込むように側石が配され、北側は側石の側面が小口面に接するように組まれている。その平面形状は、東小口から3枚目の側石のあたりが最も膨らむ。東小口から西小口にかけて緩やかにすぼまる長台形である。側石の膨らみは北側石が比較的顯著で、南側石はほぼ直線的である。小口石は両小口とも2枚の石材を用いているが、西小口と東小口で石の用法が異なる。西小口は、長辺22cm、短辺12cm、厚さ6cmの長方形形状の板石の上に、長辺36cm、短辺15cm、厚さ10cmのやや大きめの石材をのせている。東小口は、南側に長辺36cm、短辺25cm、厚さ6cmの三角形状の板石を立て、その北側に長辺31cm、短辺14cm、厚さ5cmの長方形形状の石材を並べるように立てている。側石は、北側石が長辺25～43cm、短辺14～25cm、厚さ3～9cmの板石9枚、南側石が長辺25～35cm、短辺12～31cm、厚さ3～10cmの板石8枚で構成される。北側石は石材の広口面を横長に用いるもの3枚、縦長に用いるもの5枚である。残る1枚は東端から3枚目の石材で、長辺43cm、短辺25cm、厚さ9cmの板石の広口面を下にして、斜めの状態となっていた。東端の2石の間に隙間があることと、3枚目の石材の状態から見て、北側石の東側は当初の石組みがやや崩れている可能性がある。それに伴い、中央部の蓋石が当初の高さから下に沈んでいることが考えられる。南側石は石材の広口面を横長に用いるもの2枚、縦長に用いるもの6枚である。西端の2枚は他の石材より小さく、2石の間は隙間がある。全体的に見て、不揃いな石材を用いて無理をしていることや、両小口が小型の石材2枚で構成されること、石材間に隙間あることなど、やや雑な造りといえよう。石棺に用いられている石材の多くは、細粒花崗岩である。遺物は石棺の内外ともに出土していない。

### 出土遺物

周溝内から土師器の甕1点(第30図-26、図版18-26)、砥石1点(図版18-45)、鉄鏃1



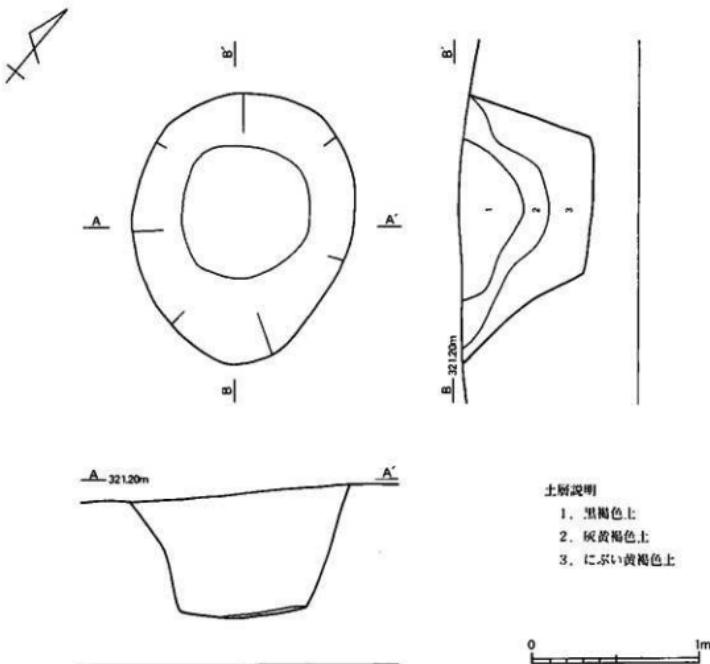
第28図 SK 1実測図 (1:30)

点(第32図-38、図版18-38)が出土した。26は球形の体部に口縁部はごく短く外反して外上方へと延び、口縁端部を尖り氣味に丸く納める。45は細粒花崗岩の砥石である。断面は歪んだ梢円形で、わずかに使用痕が認められる。重さは720.0 gである。38は柳葉式の鉄鎌で、茎部を一部欠いている。鎌身部側縁は直線的で長く、下端部は内湾して断面円形の関節に至る。茎部は断面方形でわずかに遺存する。全長10.9 cm、鎌身部長8.5 cm・幅1.6 cm、厚さ0.3 cm、重さ26.34 gである。

その他の遺構と出土遺物

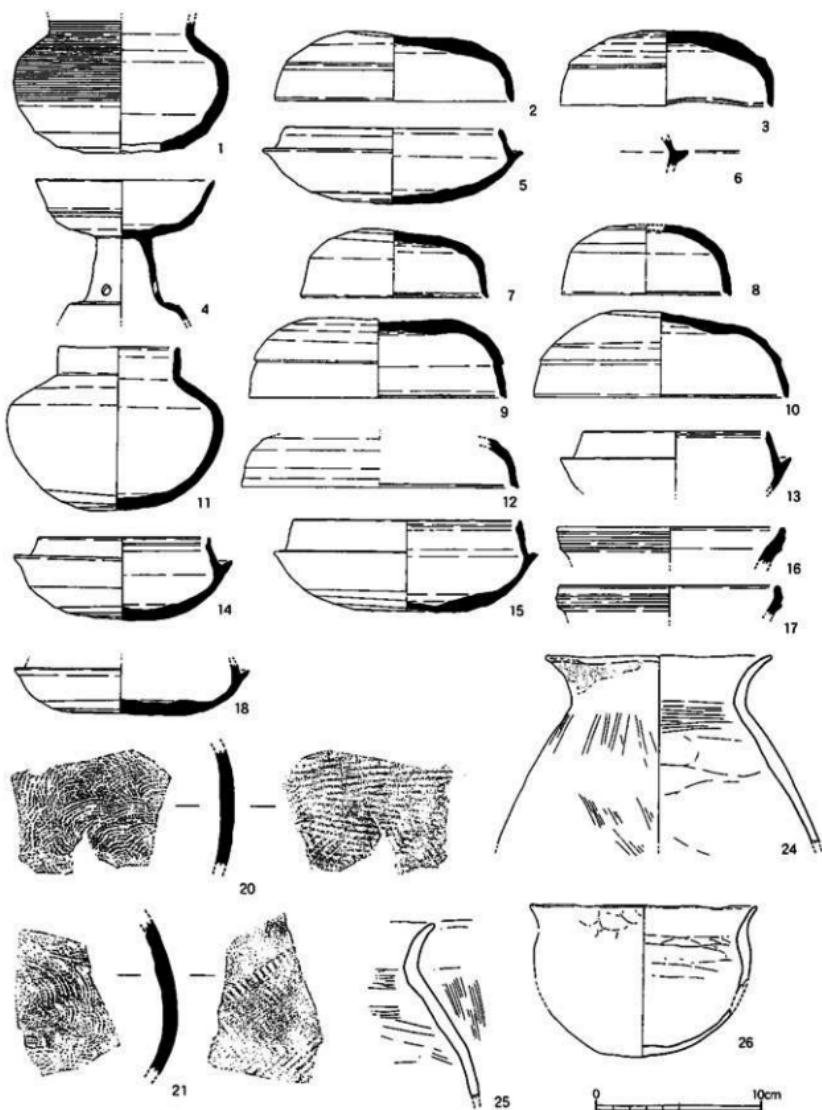
SK 2 (第29図)

墳丘の下層から検出された土坑である。平面形は梢円形で、長軸1.8m、短軸1.3m、深さ0.8mである。埋土は上層から、黒褐色土、灰黄褐色土、にぶい黄褐色土である。坑内から遺物は出土していないが、付近から縄文土器片が1点出土している。

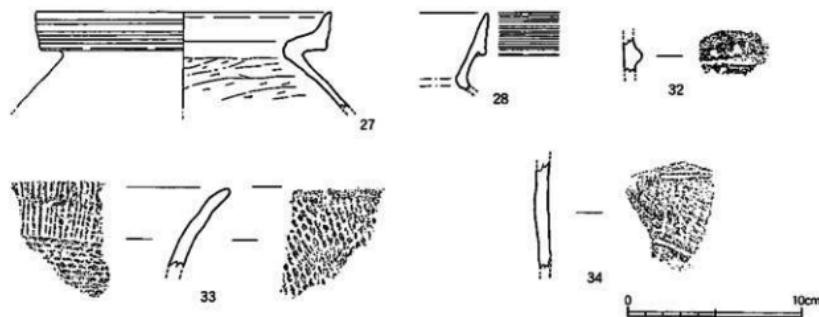


第29図 SK 2実測図 (1:30)

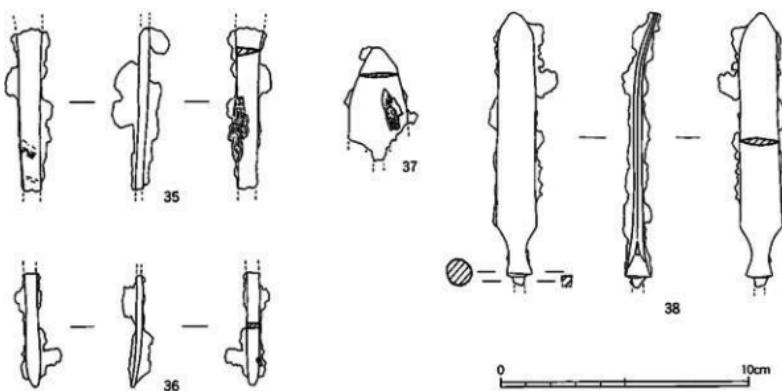
調査区内から縄文土器片1点(第31図-34、図版18-34)、古銭1点(第33図-42、図版18-42)が出土した。34はSK 2の付近から出土したもので、摩滅が著しいが外面に条痕文が見られる。45は「文銭」と呼ばれる寛永通宝で、背面上部に「文」の字を鋳出している、外径2.4cm、重量3.21gである。



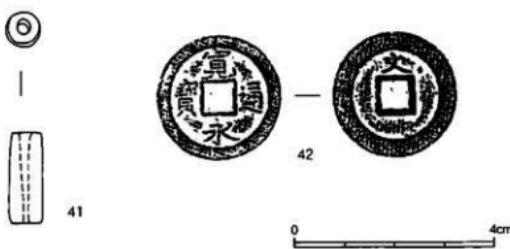
第30図 土器実測図(1) (1:3)



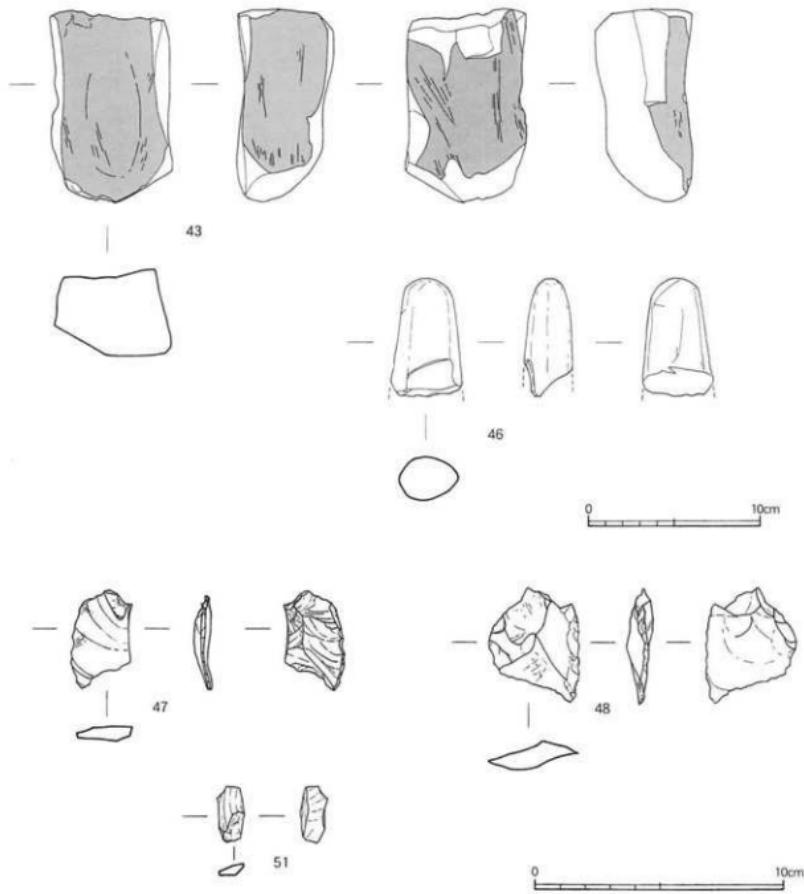
第31図 土器実測図(2) (1:3)



第32図 鉄製品実測図(1:2)



第33図 管玉実測図、古錢拓影 (1:1)



第34図 石製品実測図 (1:2, 43・46 1:3, アミ目は底面)

第4表 稲干場第2~4, 9号古墳出土土師器観察表

遺物番号	器種	出土古墳	測量(cm)			調整	色調	施土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
22, 23	壳?	2号	/	/	外面部: ハケ目、内面部: ハラ削り	外面部: 淡黄褐色、内面部: 黄褐色	1~5mm程度の砂粒を含む	不良	摩滅度しい	
24	甕	4号	13.6	/	外面部: 口縁~頂部はナデ、胴部はハケ目 内面部: 口縁~頂部はナデ、胴部はハラ削り	内外面部: 淡黄褐色	1~3mm程度の砂粒を含む	良	口縁部に埋付着	
25	甕	4号	/	/	外面部: 口縁~頂部はナデ、胴部はハケ目 内面部: 口縁~頂部はナデ、胴部はハラ削り	内外面部: 淡黄褐色	1mm程度の砂粒を含む	良		
26	甕	9号	13.6	9.1	外面部: 口縁はナデ、頂部~底部はハケ目 内面部: 口縁はナデ、頂部以下はハラ削り、底部はナデ	内外面部: 黄褐色~黒色	1~3mm程度の砂粒を含む	不良	表面に熱を受け付けている、埋付着	

## V まとめ

### 第2号古墳

周溝をもつ直径約10mの円墳である。墳頂部で確認した土坑内に木棺等の痕跡が確認されないことや、第6層の灰黄褐色土（第7図）が埋め戻されたような状況を示すこと、さらに墳丘の盛土が失われ、墳丘上面が削平されたような状況にあることなどから、この土坑は後世の盗掘坑で、埋葬施設が消滅していると判断される。埋葬施設の実態は不明だが、土坑の平面形から主軸を北東・南西方向とした、木棺墓などであった可能性がある。出土した管玉は、埋葬施設に副葬されたものが、後世の盗掘の際に取り残されたものである可能性が高い。周溝から出土した土師器片の表面には煤が付着し、火を使用する行為に使用されたことがうかがえる。口縁部片が出土しておらず器種や時期は不明である。古墳の造営時期は、出土遺物からは明確にし得ないが、第3・4号古墳と同じ尾根上に立地していることから、近似した時期の6世紀前半～中頃と考えられる。

### 第3号古墳

周溝をもつ直径約10mの円墳で、墳丘上に並ぶ2基の埋葬施設を確認した。西側のSK1は二段構造になっているが、土層観察から中央の長さ2.3m、幅0.6～0.7mの範囲に1～3層が見られた。この部分に木棺を安置していたと考えられ、木棺直葬であることが判明した。SK2も埋葬施設と考えられるが、残存状況が悪く、実態は不明確である。SK1と比較すると、木棺の存在も明確でなく、底面が傾斜して、規模も小さい。SK2の被葬者は、小児であった可能性も考えられる。墳丘の北西側裾部約1/4は周溝が途切れて、陸橋状になっている。このような陸橋部の存在は、三次市南畠敷町の綠岩古墳<sup>(1)</sup>などで類例が見られるが、本古墳では、この部分にSD1が取り付いている。SD1は、ここからから斜面下方に延びる墓道の可能性が考えられる。墳丘西側の周溝部から出土した須恵器（図版8b、c）は、周溝西側肩の上端レベルより高いところの黒褐色土層中から出土し、墳丘上から転落してきたものと考えられる。墳丘上に供献されたもの、祭祀に使われたもの、埋葬施設に納められていた副葬品が流出したもの等の可能性が考えられるが、古墳の造営年代を考える上で重要である。短頸壺の底部は穿孔されており、祭祀的な行為に使われたことをうかがわせる。これらの須恵器は、田辺昭三氏の陶邑編年<sup>(2)</sup>では、杯身と杯蓋（第30図-2・3・5・6）はMT-15に併行し、墳丘周辺から出土した短頸壺（第30図-1）は頸部から口縁部への立ち上がりがやや外反するなど、MT-47の特徴を持つ。高杯（第30図-4）には脚部に強い屈曲部をもつ点など、脚部にMT-15より更に古いTK-216の特徴も見られる。以上のことから、第3号古墳の須恵器群の時期は、6世紀初頭と見られ、第3号古墳の造営時期は、6世紀前半～中頃と考えられる。

### 第4号古墳

周溝をもつ直径13mの円墳で、本古墳群中、第1号古墳（未発掘、直径16m）に次いで2番目の大きさである。周溝は古墳をほぼ一周するが、北側で一部途切れており、この部分が墳頂部

へ至る陸橋部の可能性がある。SK1は、後世の削平や掘乱により残存状況は悪く、埋葬施設の東西端部の底面付近をわずかに検出したのみである。このため、詳しい埋葬の実態は不明である。SK2は周溝内に位置しており、追葬された埋葬施設と考えられる。墓坑の下段に木棺を安置していたものと判断される。出土した須恵器は、木棺の上に置かれた副葬品と考えられ、これらの須恵器のうち、杯身・杯蓋（第30図-9・12・14・15）は、陶邑編年でMT-15の特徴をもつ。短頸壺（第30図-11）は、第3号古墳出土のものに比べ、肩部から口縁部への立ち上がりがほぼ垂直で立っており、杯身・杯蓋と同様にMT-15の特徴をもつ。こうしたことから、第4号古墳の須恵器群の時期は6世紀前半で、第3号古墳の周溝部出土の須恵器群とほぼ同時期と判断される。古墳の造営時期も、6世紀前半～中頃と考えられる。鉄鏃は金田第2号古墳<sup>(3)</sup>で類例が見られる。

#### 第9号古墳

周溝をもつ直径10.5mの円墳である。埋葬施設は墳頂部の箱式石棺で、石棺材が不揃いで隙間が多いなど、やや粗雑な造りである。箱式石棺の墓坑は、地山の黄褐色土まで掘り下げられている。石棺内から遺物は出土していないが、周溝から土師器甕（第30図-26）が出土した。甕の胴部外面は、土器の表面が剥がれ、痛みがひどく、第2・4号古墳出土の土師器片（遺物番号22・23・24・25）と同様に、直火で加熱されたと見られる。古墳時代後期の庄原市七塚町の浅谷山西古墳<sup>(4)</sup>で出土した土師器の甕や、古墳時代中頃から後期の堅穴住居跡出土の土師器に類例が見られるが、古墳の築造時期を判断する材料としては不十分である。ここでは、他の古墳と同様の6世紀前半～中頃の築造を考えておく。

#### 各古墳の時期と特徴

これまで述べた古墳の時期を整理すると、調査を行った4基の古墳は、6世紀前半～中頃に相次いで造営されたと推測でき、稻干場古墳群の西部に集中することから、6世紀前半から中頃にかけて、稻干場古墳群の西部に古墳が集中して造営されたことが明らかとなったと言える。4基の古墳は尾根の先端や頂部、斜面と立地はやや異なっているが、墳丘の周囲に周溝を廻らし、掘削土を盛り上げて墳丘を構築していたと考えられ、墳丘の築造方法に共通性が認められる。第3号古墳以外の3基の古墳では、周溝から土師器の甕が出土しており、いずれの土器も外面に直火を受けた形跡が見られ、煮焼きに使われたことがうかがえる。浅谷山西古墳で出土した、古墳時代後期の土師器の甕も口縁部に煤が付着している。加熱に使われた土師器が、何の目的でどのように使用されたのかは、今後、類例の増加を待って再考したいが、古墳造営に当たって、埋葬祭祀のような行為に使用された可能性が考えられる。第2～4号古墳は同一尾根上に相前後して造られており、各古墳の被葬者が血縁関係を有するなど密接な関係をもっていた可能性が考えられる。古墳群の北西側には番久遺跡・原畠遺跡<sup>(5)</sup>が所在し、古墳時代の集落跡が確認されており周辺の番久古墳群や市場古墳群を含め、稻干場古墳群との関連が想定される。

## その他遺構・遺物

**縄文時代** 各調査区内から縄文時代のものと見られる土器片が数点出土している。第4号古墳出土の楕円形の押型文土器（第31図-33）は、早期のものであり、縄文時代も早くからこの地域で人の活動があったことがうかがえる。第3号古墳出土の凸帯に刻み目が施される土器（第31図-32）は、口和町伊与谷地区で採集された土器片<sup>(6)</sup>に類例が見られ、縄文時代晚期のものと考えられる。また、第2号古墳調査区内のS B 1出土の石器（第34図-48）は、縄文時代に属する搔器と見られる。また、第4・9号古墳の墳丘下からは土坑を確認しており、少なくとも古墳が造られる以前のもので縄文時代の遺構の可能性もある。さらに、古墳群南東側に独鉛石が出土した上原畠遺跡<sup>(7)</sup>が所在しており、古墳群の周辺に縄文時代の遺構が存在する可能性は高い。

ところで、中国山地における縄文時代の生活について、近藤義郎は「長期間に亘らない狩猟採集の場」<sup>(8)</sup>という考え方を示している。潮見浩も当時の縄文土器の時期的に偏った出土状況から「中国山地における縄文時代の生活を再検討する必要」<sup>(9)</sup>を述べており、今回出土した縄文土器は、中国山地南部に位置する口和町周辺の縄文時代の人々の暮らしぶりを考えていく上で、貴重な資料と言える。

**弥生時代** 第2号古墳調査区内で検出したS B 1から出土した弥生土器は、後期中葉のものである。同じく第2号古墳調査区内のS K 1からも弥生時代後期の土器片が出土している。S B 1の西壁北側の0.4×0.5mの範囲に焼土と炭化物を確認しているが、炉跡のような施設は無く、何らかの火を使う作業スペースであった可能性がある。今回の調査では弥生時代の住居跡、土坑が検出されたが、1軒のみで存在していたとは考えにくく、付近に同時代の住居跡を含む遺構が存在する可能性が高い。古墳群の北西には、本古墳群と同様に中国横断自動車道尾道松江線建設事業に伴って発掘調査の行われた原畠遺跡が所在し、弥生時代の住居と考えられる円形の住居跡が4軒検出されている。今回の調査例と合わせ、今後周辺地域の弥生時代集落の様相を考える上での基礎資料となったと言える。

## 註

- (1) (財) 広島県埋蔵文化財調査センター『緑岩古墳—三次地区工業用地第2期造成工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査一』昭和58(1983)年
- (2) 山邊昭三『須恵器大成』角川書店 昭和56(1981)年
- (3) (財) 広島県埋蔵文化財調査センター『金田第2号古墳発掘調査報告書』平成11(1999)年
- (4) (財) 広島県教育事業課『浅谷山西古墳・浅谷山1号遺跡・小深遺跡』平成22(2010)年
- (5) (財) 広島県教育事業課『11番久遺跡』・『12原畠遺跡』『年報6 平成20年度』平成22(2010)年
- (6) 潮見浩『編後口和町湯木伊与谷出土の縄文式土器』『古代吉備 第5集』昭和51(1976)年
- (7) 口和町教育委員会『口和町誌』平成12(2000)年
- (8) 近藤義郎『蒜山原』昭和31(1956)年

## 図 版



(1) 稲干場第2号古墳



a 調査前（北東から）



b 空中写真（直上から）



c 墓丘断面（北東から）



a 墓丘断面（北西から）



b 完掘状況（北東から）



c 墓頂部完掘状況  
(南から)

a 調査区南部完掘状況  
(南から)

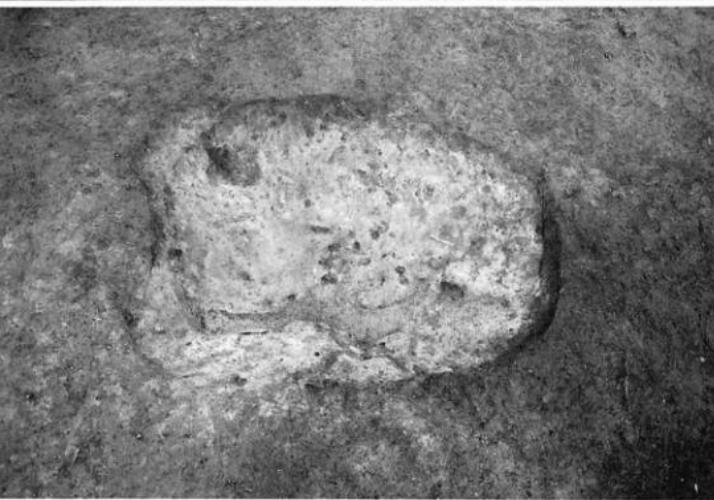


b S B 1 (南東から)



c SK 1 (南東から)

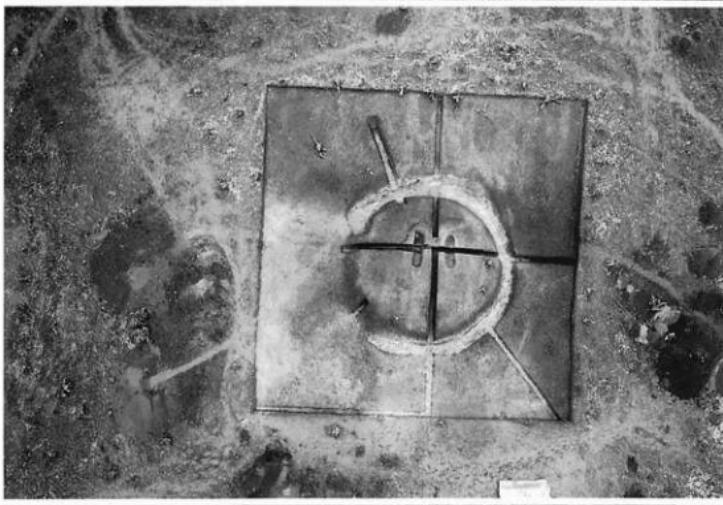




(2) 稲干場第3号古墳



a 調査前（南から）



b 空中写真（直上から）



c 全景（西から）



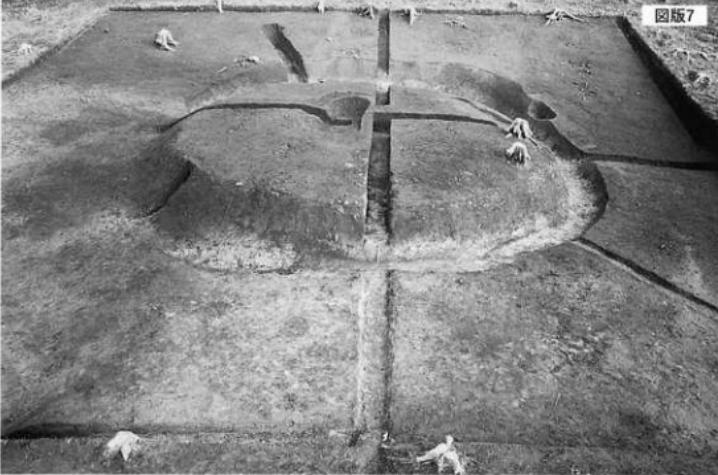
a 全景（南から）



b 塗丘断面（西から）



c 塗丘断面（南から）



a 完掘状況（西から）



b 完掘状況（南から）



c SK 1（西から）



a SK 2 (西から)



b 周溝遺物出土状況  
(西から)



c 周溝遺物出土状況  
(南から)

(3) 稲干場第4号古墳

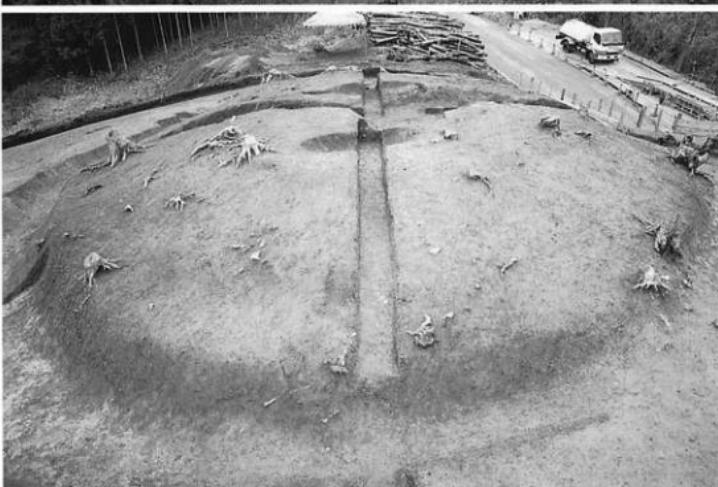
a 調査前（西から）



b 空中写真（西から）



c 全景（南から）





a 墓丘断面（北から）



b 墓丘断面（西から）



c 完掘状況（北から）



a SK 1 (南西から)



b SK 2 遺物出土状況  
(北西から)



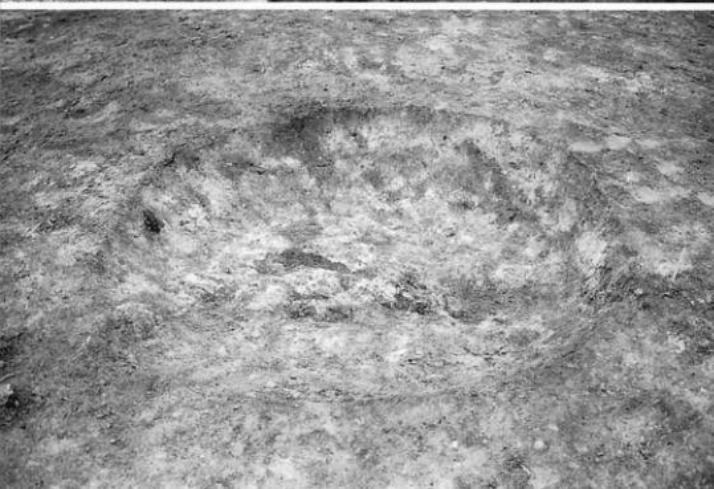
c SK 2 遺物出土状況  
(南西から)



a SK 2 (北西から)



b SK 2 完掘状況  
(北西から)



c SK 3 (南から)

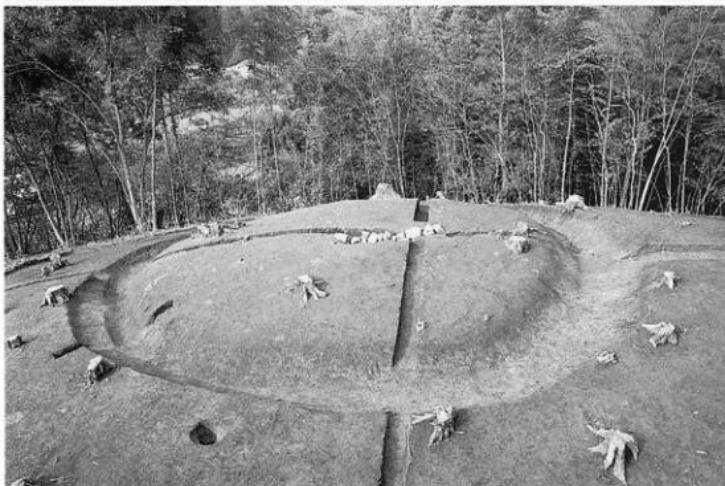
(4) 稲干場第9号古墳



a 調査前（東から）



b 空中写真（直上から）



c 全景（南から）



a 全景（東から）



b 墓丘断面（東から）



c 墓丘断面（南から）



a 完掘状況（南から）



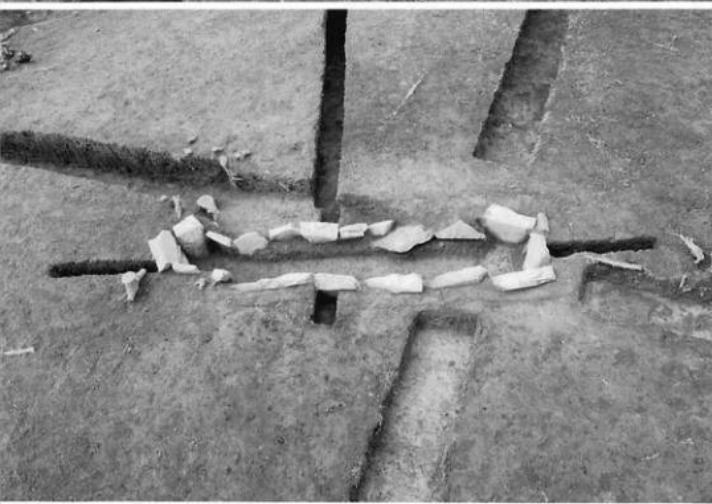
b 完掘状況（東から）



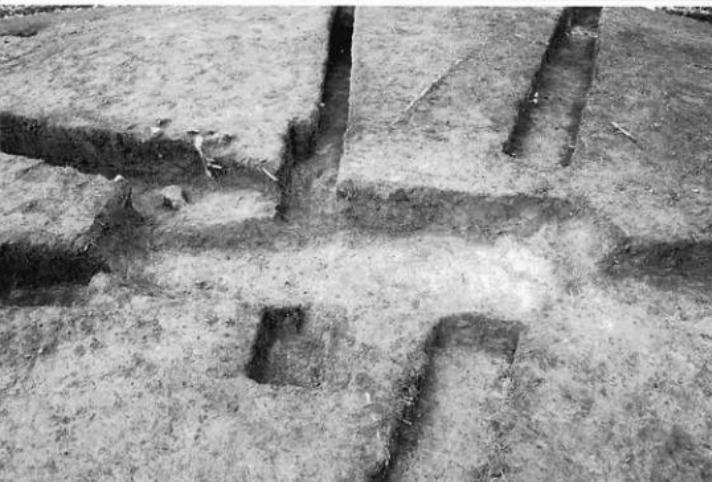
c SK 1 蓋石検出状況  
(南東から)



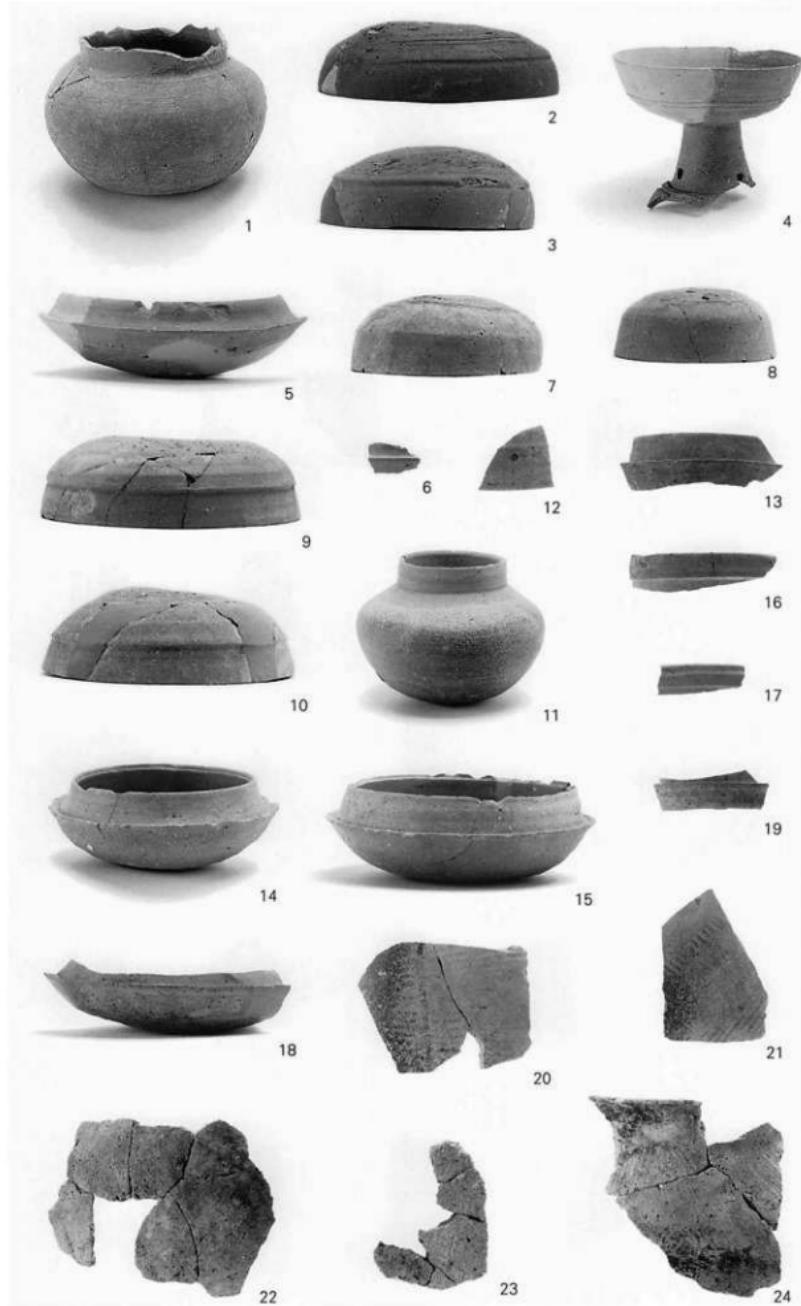
a SK 1 蓋石検出状況  
(南西から)



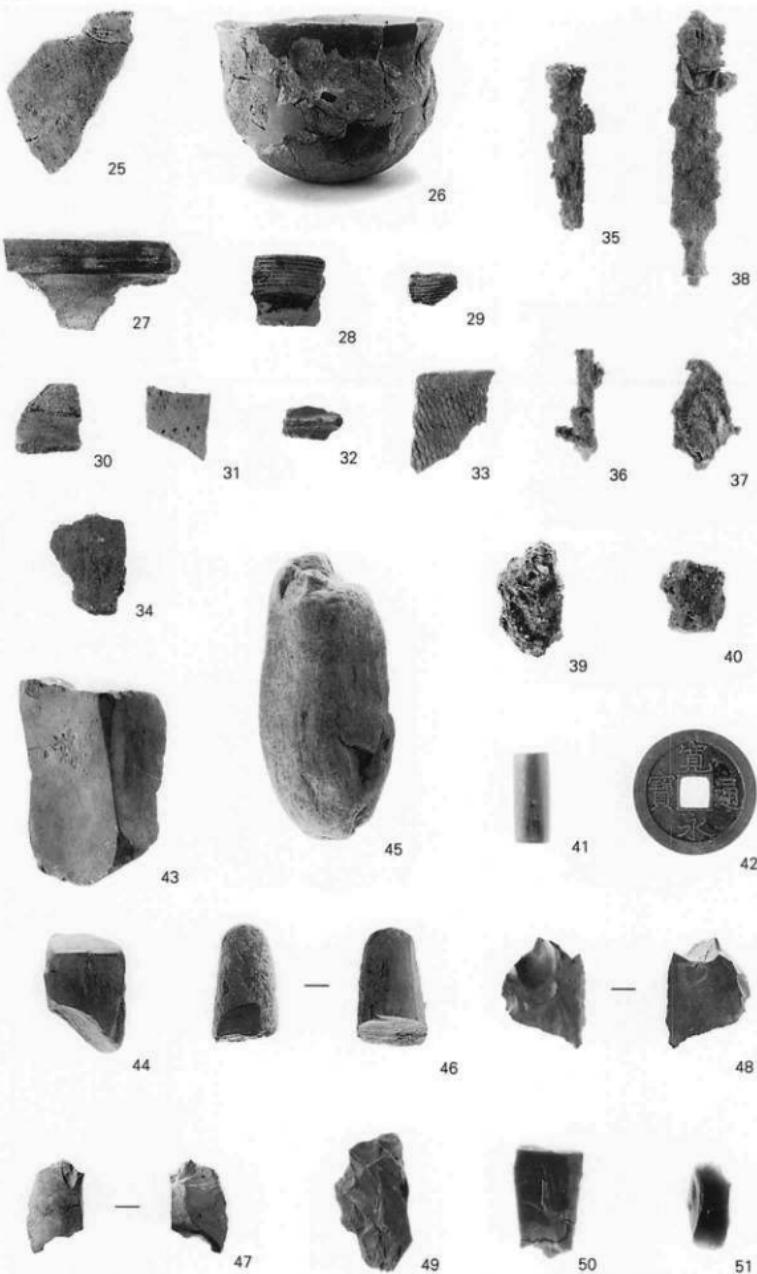
b SK 1 側石検出状況  
(南東から)



c SK 1 完掘状況  
(南東から)



出土遺物（1）



出土遗物（2）

## 報告書抄録

ふりがな	ちゅうごくおうだんじどうしゃどうおのみちまつえせんけんせつにともなうはっく つちようさほうこくしょ 22
書名	中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う発掘調査報告書(22)
副書名	稻干場第2~4・9号古墳
卷次	22
シリーズ名	財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書
シリーズ番号	第45集
編著者名	島田朋之、沢元保夫
編集機関	財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室
所在地	〒733-0036 広島県広島市西区観音新町四丁目8番49号 TEL082-295-5751
発行年月日	2012年3月5日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 m <sup>2</sup>	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
いなほし ば だい こうこ ふん 稻干場第2号古墳	ひろしまけん しょうばらし 広島県庄原市 くわちらうおおつき 口和町大月	34210	34603- 27	34° 54' 28"	132° 52' 51"	2007.1.009 ~ 2009.12.21	400	記録保存調査
いなほし ば だい こうこ ふん 稻干場第3号古墳	ひろしまけん しょうばらし 広島県庄原市 くわちらうおおつき 口和町大月	34210	34603- 28	34° 54' 31"	132° 52' 54"	2007.1.009 ~ 2009.12.21	380	
いなほし ば だい こうこ ふん 稻干場第4号古墳	ひろしまけん しょうばらし 広島県庄原市 くわちらうおおつき 口和町大月	34210	34603- 29	34° 54' 30"	132° 52' 54"	2007.1.009 ~ 2009.12.21	750	
いなほし ば だい こうこ ふん 稻干場第9号古墳	ひろしまけん しょうばらし 広島県庄原市 くわちらうおおつき 口和町大月	34210	34603- 34	34° 54' 35"	132° 52' 55"	2007.1.009 ~ 2009.12.21	380	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
稻干場第2号古墳	古墳	古墳時代	住居跡 土坑	土師器 弥生土器 砥石				
稻干場第3号古墳	古墳	古墳時代	土坑 溝状遺構	須恵器 石斧				
稻干場第4号古墳	古墳	古墳時代	土坑	須恵器 土師器 鉄器				
稻干場第9号古墳	古墳	古墳時代	箱式石棺 土坑	土師器 鉄器 砥石				

要約 第2号古墳は、直径約10mの円墳で、埋葬施設は不明であるが、管玉が1点出土した。第3号古墳は、直径約10mの円墳で、埋葬施設は土坑2基である。西側の周溝部から須恵器がまとまって出土した。第4号古墳は、直径約13mの円墳で、埋葬施設は土坑1基である。周溝内から土師器の甕が出土した。北西側の周溝底面に追葬(土坑)があり、須恵器、鉄鎌が出土した。稻干場第9号古墳は、直径約10.5mの円墳で、埋葬施設は箱式石棺1基である。各古墳の時期は、出土遺物等から6世紀前半から中頃に相次いで築造されたものと考えられる。また、各古墳は周溝を廻らし、掘削土を利用し填丘を築造する点で、共通性が認められる。第3号古墳を除く各古墳の周溝からは、煮炊きに使用した土師器が出土しており、古墳造営に当たっての埋葬祭祀が行われた可能性が考えられる。第2号古墳調査区内南側に弥生時代後期の竪穴住居跡と土坑を確認し、第4・9号古墳の填丘下から古墳築造以前の土坑や縄文土器などが出土した。

財團法人広島県教育事業団発掘調査報告書第45集

中国横断自動車道尾道松江線建設

に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(22)

船干場第2～4・9号古墳

発行日 平成24(2012)年3月5日

編集 財團法人広島県教育事業団事務局 埋蔵文化財調査室

〒733-0036 広島市西区観音新町四丁目8番49号

TEL(082)295-5731 FAX(082)291-3951

発行 財團法人広島県教育事業団

印刷所 朝日精版印刷 株式会社